

MSH Dialogue（関係者による対話）
『本気』でつくるサステナブルな社会
報告書

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

1. 目的

持続可能な社会は、地域資源を活用した地域課題の解決・改善につながる事業、地域経済・雇用の循環をつくらなければ実現することができない。中部 7 県には、地域資源を活用し、そういった事業、循環を作ろうとしている主体がいくつもある。そして、その主体が抱えている課題には共通項がある。これが、過去 2 回のステークホルダーダイアログで見出したことである。

EPO 中部第 3 期最終年度に行う本企画は、協働取組、サステナブルビジネス、ESD に関する事業を地域でいかに発展させるか、本気で取り組むか、をコンセプトしている。

昨年度のダイアログの成果は、協働取組やサステナブルビジネスを発展させるには、「公共性」と「経済性」の視点が重要であり、客観的に評価をしつつ、事業戦略を検討することの大切さを学び合った。ESD に関しては、昨年 11 月に開催された ESD ユネスコ世界会議を契機に、地域に ESD を浸透させるための仕組みづくりをすすめる主体の形成がされつつあることを共有した。

今年度はその成果を踏まえて、取組報告から課題に真っ向に向き合い、知恵や経験、アイデア、提案を持ち寄る対話の場を設計した。

ダイアログ終了後、参加者の皆さんの、持続可能な社会づくりに寄与する活動に対する本気度が増し、現場に戻って具体的に取り組むことが明確になる、それが本企画の目的である。

2. 内容

日 時：平成 27 年 1 月 29 日（木）14:00～18:00（13：30 開場）

場 所：ウインクあいち 会議室 1104・1105

参加者：70 名(他 録音でのメッセージ 1 名)

プログラム

①オリエンテーション

②MSH ダイアログ

ダイアログ 1「サステナブルな地域をつくるために…公共性・経済性という指標」

ダイアログ 2「プロボノの可能性に迫る…サスビズの成功に向けて」

ダイアログ 3「ESD を地域で実践するために…仕組みづくりと評価」

③全体会

各ダイアログの共有時間

まとめ

3. プログラム報告

(1)オリエンテーション 14:00～14:15

①主催者挨拶

環境省中部地方環境事務所環境対策課 課長 遊佐秀憲氏

EPO 中部は3年計画の3年目の最終年度を迎えた。毎年協働に関するダイアログを実施し、初年度は、広域展開及び支援の持ち寄りによる、効果的な事業展開を目指して、「中部 7 県協働会議」を実施した。昨年度はマルチステークホルダーダイアログ「協働と ESD」で進めた。今年度は持続可能な社会に向けての事業化を模索してきた。中部 7 県では環境と経済、人づくり、地域に根差した協働取組がそれぞれの調和に基づく、持続可能な社会づくりに向けて創出されている。ビジネス化を目指している。全国でも



中部地域はかなり有力だと言われている。本日は 3 つのテーマで、それぞれに分かれて議論を行うが、理解を深めて頂ければと思う。昨年度、当事務所の事業で、地域活性化に向けた協働取組促進事業で採択された 1 団体、今年度は地域活性化に向けた協働取組の加速化事業の 2 団体に来て頂き、事例発表もして頂く。本会議を通して、協働と ESD を通じて、問題解決を可能にし、地域における事業化の活性化に貢献できればと思う。

②主旨説明

環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフプロデューサー 新海洋子

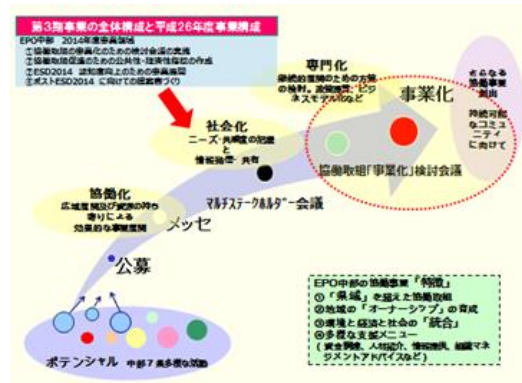
環境省中部環境パートナーシップオフィスは 3 年を一括りとして事業を展開している。今年度は協働取組、サステナブルビジネス、ESD がこの地域に根付くための事業を目標とし、様々な人々と議論をしたり、現場に出向き、課題解決・改善方策を検討してきた。

1 年目は、生物多様性、里山里海と再生可能エネルギー、ESD の 3 テーマについて、中部 7 県で実践をされている方を招き、この地域におけるサステナブルビジネスと協働取組はどのような形で行われているのかを議論する「協働会議」を開催した。その際に課題となったのが、いかに市民を巻き込み、いかに組織を継続的に安定して持続させ、いかに資金調達をするのか、ということであった。そして、これらを解決するために、このようなステークホルダーが対話をする会議が必要だということが議論された。

昨年実施した 2 年目のダイアログは、これらの課題を明確化することを目的とした。参加者からは「良いことをしているからお金や仲間が増えるということではない。消費者のニーズを考え、何が必要なかを考えなければならない」という意見や、「今までのようなやり方では、人々に伝えることができない」ことが指摘された。公共性と経済性という視点からもう一度事業を見直さなければ、サステナブルビジネスや協働取組は、地域の中でなかなか受け入れられないと指摘された。

昨年実施した 2 年目のダイアログは、これらの課題を明確化することを目的とした。参加者からは「良いことをしているからお金や仲間が増えるということではない。消費者のニーズを考え、何が必要なかを考えなければならない」という意見や、「今までのようなやり方では、人々に伝えることができない」ことが指摘された。公共性と経済性という視点からもう一度事業を見直さなければ、サステナブルビジネスや協働取組は、地域の中でなかなか受け入れられないと指摘された。

3 年目となる今回は、「本気で作る」というタイトルで 3 つの分科会に分かれ、みなさんと議論したい。協働の分科会では、「公共性」と「経済性」の二つのキーワードをもとに議論を進めたい。例えば、今回事例紹介をする「めぐる」プロジェクトは、生ごみのリサイクルでできたお米を使ったお酒づくりをしており、そのお酒をリユースびんにつめ回収するという 2 つの



循環を可能にした事業である。「めぐる」というお酒がそのツールになっている。しかし、売れていない。それではいけない。売れて、伝えていかなければならない。伝えて、売らなければいけない。いくら良いものをつくっていても、人々が使ってくれなければマーケットも大きくならないし、多くの人には伝わらない。変えていくために、皆さんの力を必要としている。どうしたら本当に私たちが大事にしたいものを市場にのせ、お金にして、地域の経済循環、環境の循環をつくっていくことができるのか、それが公共性と経済性の意味である。

2つ目の分科会テーマは「プロボノ」をテーマにしている。プロボノは、公共善と言われていて、特にNPOが苦手とする、マーケットの把握や市場調査、生産管理や原材料調達などを、得意な企業の方にプロジェクトに入ってもらい、指導していただき、社会的意義のある活動やサービスの質を高める支援をすること、である。プロボノをする人をプロボノワーカーと呼んでいる。今日は、日本にプロボノを持ち込んだと言われる、東京のNPOの方にゲストに来ていただいている。またこの地域でプロボノ活動をしている方々と、その可能性と発展について協議する場をもつ。

3つ目の分科会は「ESD」をテーマにしたものである。ESDは持続可能な社会をつくる人づくりであり、「公共性を考え、生産、流通、消費をする人材」を育む、増やすことである。

今日のダイアログでは、この3つのテーマ「公共性と経済性」「プロボノ」「ESD」を掲げて、それぞれに知見、経験、苦勞、課題を持ち寄り、成果を生み出すための議論をしたい。分科会の後、全体会を再度全員が集まって行いが、各分科会で話したことや本気で取り組もうと思ったことを共有する場とする。もう一度各ダイアログのテーマと内容を紹介する。

ダイアログ1は、持続可能な社会をつくるために、事業を「公共性」と「経済性」という指標で見直すことの重要性を共有することとしている。先ほど少し紹介した「めぐる」がどうしたら売れるのか、何が加わったら事業発展ができるのか、どうしたら伝わるのか、について議論を深めていただきたい。また、今年度EPO中部が支援事務局として関わった「ブルーフラッグ」認証取得のための事業がある。福井県高浜町の海岸で「ブルーフラッグ」という国際認証を取得し、高浜の環境や地域の持続性に寄与する事業を展開するというものだ。観光客がたくさん来て、地域の子どもたちも楽しんで、学んでもらえるような海にしようとチャレンジしている。どうしたら観光客が増えるのか、どうしたら高浜の海に誇りを持って「この海は世界一なんだ」と言えるのか、を今日は高浜町からゲストを迎えているので、活動を紹介していただき、意見交換をしてほしい。もう一つの事例として、昨年度EPO中部が支援事務局として関わった「越の国自然エネルギー協議会」の事業が、昨年度に引き続き、今年度どのように展開されているのかについて話題提供いただき、事業の今後の発展性について意見を交わしていただきたい。氷見市で地元の木材を使った木質ペレット、薪ストーブ、ボイラーの普及に取り組んだ。今年はカーボンオフセットの仕組み作りにチャレンジしていると聞いている。

ダイアログ2は、「持続可能な社会の実現には、思いだけでは難しく、もっと違う必要な視点や手法を加味して事業展開をしなればいけない」という現状を前に、そのスキルを持っている企

持続可能な社会を実現するには

地域資源を活用した、
地域課題の解決・改善につながる、
地域経済（雇用）の循環を可能にする
ものづくり、サービスをつくりだすことが必須となる。
●事業化を目的とする協働取組・サステナブルビジネス●

…公共性と経済性
…プロボノ

と同時に、その価値を理解し、行動・実践する
「人材の育成」が必須である。…ESD

持続可能な地域をつくるために …公共性・経済性という指標…

地域では様々な地域資源を活用した、サステナブル社会を実現するための「協働取組」が実践されている。

- 市民の理解と共感、参加を得る事業にいかしていくか。
- 地域全体での包括的な取組へいかに発展させていくか。
- 価値のある事業をいかに地域に根づかせるか。

「協働取組」がもつ課題に対して、「公共性」「経済性」の視点から意見を交わす。

プロボノの可能性に迫る …サスピズへの成功に向けて…

サステナブルな社会をつくるためには、
「斬新な発想」と「積み重ねた経験」のコラボレーションによる「新たな社会価値の創造」が必要である。
プロボノはそれを可能にする「策」である。

企業の視点から見ると、社員の「生きた研修」の場となり、会社の財産である「人材の育成」になる。
NPOの視点から見ると、「足りないものが補完」され、社会影響力を高めることができる。

このマッチングを成立させ、プロボノの価値を社会に根づかせるか。多様なステークホルダーと議論する。

業や行政の人材が「プロボノ」として参画する可能性についての協議をしていただきたい。EPO 中部では、プロボノに関する研究会を開催しており、社会的価値を持つ事業を展開しようとしている主体と、プロボノのマッチングの可能性を模索している。今日は、日本にプロボノという概念や手法を持ち込まれた NPO 法人サービスグラントの嵯峨氏をゲストにお招きした。嵯峨氏にヒアリングに行き、最初、プロボノの価値や機能がよく理解できなかったが、みんなで知恵や組織、専門性を合わせて、持続可能な社会を創っていくコラボレーションのためのワーカードと今は理解している。今年度、半田市にある社会福祉法人が地元の竹林の保全管理と災害時のエネルギーの確保のために、地元の竹ペレットを用いたエネルギーの地産地消事業を展開し始めており、ビジネスになるために、プロボノワーカーとして企業や大学の先生、中小企業診断士に参加していただいた事例を報告する。竹ペレットの生産工程において何が不足しているのか、コストはどうなっているのか、リスクの管理はされているのか、などこの間協議してきた内容を紹介する。しかし、日本においてはまだまだ「プロボノ」が浸透しておらず、その価値を理解し進めようとしている企業が少ないのが現状である。その点を課題として、どうしたら、プロボノが浸透するか、どういう仕組みがあれば、サステナブルビジネス事業者、NPO とプロボノのマッチングが可能になる仕組みをつくることができるのか、といったところまで意見を交わしていただきたい。

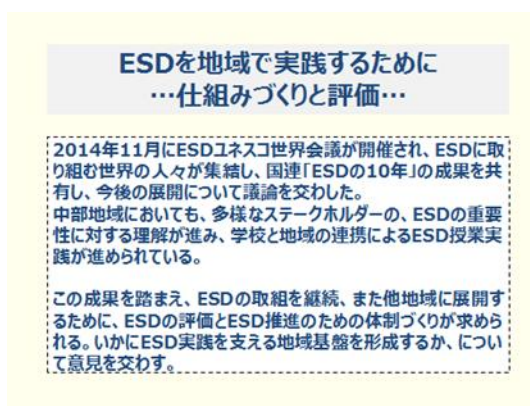
ダイアログ 3 は、持続可能な社会を創る人づくり、「ESD」である。

これからの社会を生きる世代、もちろん大人も対象だが、「持続可能な社会をつくる」人材を育まなければ、社会の持続性が担保できない状況にある。11月にESDユネスコ世界会議が開催された。この世界会議で5つのアクションプログラムが公表された。その中で、今日どうしても伝えたいことの一つに、「教育者は教育変革を促すファシリテーター」であることが世界共通の認識になった、ということである。また、岡山での開催されたステークホルダー会議では、「教育が教育を変革する」ことが共有された。また、「ESD は日本の教育

を変えていく原動力であり、子どもも教師も変化の担い手だ」とも言っている。国際社会が共有した認識である。その学びが、現状の社会に活かされていくためには、大人は何をしらいたいのか。また、閉会全体会合でのあいち・なごや子ども会議が残した宣言には、大人のみなさんに提案しますということが書いてある。本日お配りした「あいち・なごや子ども会議からのメッセージ」を読んでいただきたい。「もっと本気になってやってください」と子どもたちが言っている。

世界会議の動画は文科省のHPから見るができる。また、今日は昨年度から実施している「持続可能な地域づくりを担うESD人材育成事業」に関わった方が1/3くらい来てくださっている。その方々から「地域でこんなことが起こっています」「こんな教育がされています」「先生たちはこんなに変わりました」「地域でこんな学びがあって子ども達がこんなにかわって地域も変わるんです」という報告をしていただきたい。この事業は、地域に変化を多少なりとももたらしたと思う。しかし、この事業は来年で終わる。こうやって期間限定で、仕組みづくりができるのか。ダイアログ3では、ESDが地域で継続的に実践されるための仕組みづくり、そのためのESDの評価について、議論をしていただきたい。

今年のダイアログは、去年も使ったキーワードだが、「本気」という言葉を掲げた。今日のダイアログがスタートである。持続可能な社会は、地域資源を活用した地域課題の解決・改善につながる事業、地域経済・雇用の循環を作らなければならない。そのためには「公共性」と「経済性」を備えるサステナブルビジネスを実施し、また社会の基盤となるサステナブルな視点をもつ政策の形成が必須である。そのために、企業や行政の人材が事業に参加する仕組みをつくる。そういったセンスとスキルをもつ次世代を育む。それがESDである。それぞれのテーマが分断されているのではなく、持続可能な社会をつくるための、それぞれのパーツであり、どう組み合わせたらうまく回るかも想定しながら、本ダイアログを進めたいと思う。本当に短い時間だが、ぜひ参加と対話・協働という言葉で自分の持っている知識・情報・経験を出し合って新しい形をつくる一歩にしていきたい。



(2) マルチステークホルダーダイアログ 14:15~16:45

① ダイアログ 1 サステナブルな地域をつくるために…公共性・経済性という指標 会場：1104

[目的]

地域では様々な地域資源を活用した、サステナブル社会を実現するための「協働取組」が実践されている。

- 市民の理解と共感、参加を得る事業にいかにしていくか
- 地域全体での包括的な取組へといかに発展させていくか
- 価値のある事業をいかに地域に根づかせるか

「協働取組」がもつ3つの課題に対して、「公共性」「経済性」の視点から意見を交わす。

[プログラム]

- 趣旨説明
- 協働取組紹介
 - 平成 26 年度地域活性化に向けた協働取組加速化事業
 - 【愛知】リユースびんを活用し循環型社会を構築する「めぐる」プロジェクト
 - 【福井】ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築
 - 平成 25 年度地域活性化に向けた協働取組促進事業採択団体
- 課題提起
 - 地域の共感と理解を得るために
 - 地域経済の循環を生み出すために
 - 公共性と経済性という指標
- グループワーク
 - 多くの人々の共感性を高め、地域全体での包括的な取組へと発展をなすか。
 - 社会的に価値のある事業をいかに地域に根づかせるか。市民の理解と共感をいかに得るか。
 - 地域経済（雇用）の循環をいかに可能にするか。
- まとめ

[参加者] 23名（他スタッフ3名）

〈協働取組事業者（話題提供者）5名（3団体）〉

- 【富山】竹平政男氏(越の国自然エネルギー推進協議会会長)
- 【福井】吉岡 久氏(一般社団法人若狭高浜観光協会事務局長)
- 【福井】米川浩司氏(高浜町まちづくり課主査)
- 【愛知】永田秀和氏(NPO 法人中部リサイクル運動市民の会代表理事)
- 【愛知】星野和平氏（「めぐる」プロジェクトプロボノ）

〈出演者 18名〉

- 【富山】老田優介氏(富山県生活環境文化部環境政策課主事)
- 【富山】中川 透氏（越の国自然エネルギー推進協議会理事/ウッドスタジオ）
- 【石川】中里 茂氏（環境カウンセラー）
- 【石川】永原伸一郎氏（NPO 法人市民プロジェクト理事）

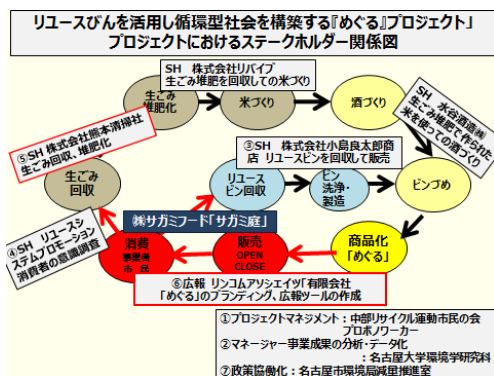
- 【石川】田中博志氏（合同会社金沢市民発電所）
- 【福井】吉川守秋氏(NPO 法人エコプランふくい事務局長)
- 【長野】宮島和雄氏(一般社団法人長野県環境保全協会専務理事)
- 【長野】丸山一博氏(長野県環境部環境政策課企画経理係担当係長)
- 【岐阜】神田浩史氏(NPO 法人泉京・垂井副代表理事)
- 【岐阜】市來 圭氏(NPO 法人ぎふ NPO センターフェロー)
- 【愛知】三矢勝司氏(名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センター特任助教)
- 【愛知】寺西慶徳氏(名古屋市環境局環境企画部環境企画課係長)
- 【愛知】平沼辰雄氏(愛知中小企業家同友会会長)
- 【愛知】大西光夫氏(NPO 法人ボランタリーネイバーズ)
- 【三重】内田郁夫氏(三重県環境生活部地球温暖化対策課環境評価・活動班副参事兼班長)
- 【三重】矢口芳枝氏(四日市大学エネルギー環境教育研究会事務局長)
- 【愛知】板谷憲志氏（パシフィックコンサルタンツ株）
- 【愛知】遊佐秀憲氏（環境省中部地方環境事務所環境対策課課長）
- 〈コーディネーター〉 新海洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフプロデューサー）
- 〈スタッフ〉 山口奈緒（環境省中部環境パートナーシップオフィス コーディネーター）
- 水野陽介（環境省中部環境パートナーシップオフィス インターン）

【内容】

■趣旨説明 環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフプロデューサー 新海洋子

平成 26 年度地域活性化に向けた協働取組の加速化事業で採択された「リユースびんを活用し循環型社会を構築する『めぐる』プロジェクト」「ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築」の 2 団体、そして平成 25 年度地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業で採択された内の 1 団体である「里山と海を結ぶ『ひみ森の番屋』地域内エネルギー循環事業」から協働取組の事例紹介を行う。その後、各事業が抱えている課題解決のために、「公共性」「経済性」の視点からの課題を抽出し、今後の事業展開についてのアドバイス、ご提案について意見を交わす。

●リユースびんを活用し循環型社会を構築する『めぐる』プロジェクト



リユースびんを活用し循環型社会を構築する『めぐる』プロジェクト

- 市民の共感
- 地域資源の活用
- 地域経済(雇用)循環

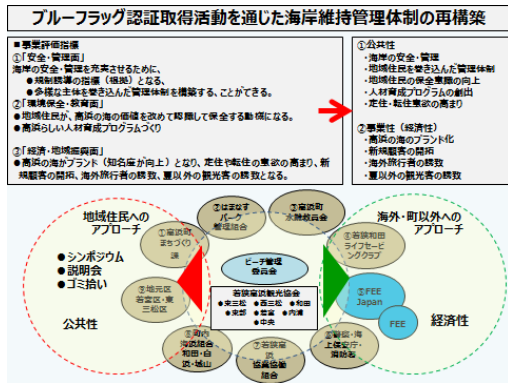
- 公共性
- 経済性

何が加わったら、事業を発展させることができる？

どうしたらもっと売れる？もっと伝わる？

- 組織の持続性
- 資金の調達
- ...

●ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築



ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築

BLUE FLAG

- 市民の共感
- 地域資源の活用
- 地域経済(雇用)循環
- 公共性
- 経済性

今の状況に何が加わったら、発展する？ 経済に結びつく？

観光客が増える？

- 組織の持続性
- 資金の調達
- ...

●里山と海を結ぶ『ひみ森の番屋』地域内エネルギー循環事業(越の国自然エネルギー推進協議会)



越の国自然エネルギー推進協議会

- 市民の共感
- 地域資源の活用
- 地域経済(雇用)循環
- 公共性
- 経済性

今の状況に何が加わったら、発展する？ 経済に結びつく？

木質ペレットストーブが売れる？ 木質ペレットが売れる？

- 組織の持続性
- 資金の調達
- ...

カーボン・オフセットの仕組みづくりにチャレンジ？ 北陸地区カーボン・オフセット推進協議会？

■事例紹介

リユースびんを活用し循環型社会を構築する『めぐる』プロジェクト

NPO 法人中部リサイクル運動市民の会 代表理事 永田秀和氏

「めぐる」というお酒はリユースびんを用いた容器の循環と食品リサイクルという 2 つの循環をテーマにしている。リユースびんの現状としては、紙容器やペットボトルが普及しており、びんは減少している。さらに、びんの中でも、**リユース可能な一升びんやビールびんが最も減少していることが課題**となっている。我々の**目指す状態は、リユースの容器に入った商品が増えて、市民がリユース容器を選択するような社会になること**と、こういった取り組みに賛同してくれる飲食店が増えて、愛知県内の食品リサイクルが推進されることである。

「めぐる」という商品をいかに認知してもらい販売し、**事業化していくかというのが本事業のテーマ**となる。そのために、酒蔵見学会やセミナーを開催したり、日本酒ブームに乗じて中部国際空港での日本酒販売イベントに出展する等の PR を行っている。また、第 5 次一般廃棄物処理基本計画を策定中である名古屋市と連携を図りながらの政策提言を行っている。そして**最も重要なのは商品のプロモーション**である。これまで、量販店等に販売を依頼してきたが、オープンマーケットでは回収が難しいという課題があった。そのため現在は、飲食店で「めぐる」を提供し、そこでまとめて回収するというクローズドマーケットで「めぐる」のプロモーションを行っている。具体的に連携を試みている相手は、(株)サガミフードという、うどんのチェーン店である。「めぐる」は食品リサイクルから出来た堆肥を使ったお米から出来ており、(株)サガミフードも食品リサイクルに取り組んでいるからである。まずは、(株)サガミフードと連携し、我々が目指す 2 つの循環を実現させたい。しかしながら、「めぐる」は売れていないのが問題である。この点についてプロボノの星野氏より説明

してもらおう。

プロボノワーカー 星野和平氏

私は 2 年前まで IT 企業で社会保険システムや e-Tax 等のシステム開発プロジェクトに関わっており、プロジェクトを開発するということには経験があり、**プロボノとして参画**した。課題についてだが、このプロジェクトが年度内に終わるにあたり、**目標と予測にギャップ**が生じる。例えば、12 月に出る新酒を「『めぐる』のボジョレー」として出したいという計画があったが、計画がずれ込んでいる。市民へのプロモーションもまだ広がりが無い。これは物流のマテリアルフロー全体を



を見てモデル化すべきであったのではないかと考え、「**売ること**」が課題だと考えた。私達が考えているリサイクル・リユースというのは「**静脈系**」のプロセスであり、課題としてここは外部不経済が働いているということ。パラダイムシフトを起こすことが必要だが、これは 1 つの NPO だけでは無理で、これまでとは違った動きをしていかなければならないと思う。政策協働・提言に結び付けて考えると、**マーケットの意識変革と行政主導のパラダイムシフトが必要で、仕掛けをどう変えるか**。例えば行政主導で酒税法を変えたり、リユースびんに入れるアルコールの量に従って酒税を変える。すると、利益にこだわる会社はリユースびんを使用するようになり、3R が促進される。そして産業廃棄物処理コストも減少し、住民に対して税金を安くしたり、市民サービスを向上させられる。市民がその還元気付ければリユースの素晴らしさも伝わる可能性があると感じており、具体的なメリットと**社会的な共通資本をどう捉えるか**を考えていかななくてはならない。成熟社会のサステナブル社会をどう作っていくかは行政主導だが、ただ行政に言っても本気にはなってくれない。**住民コンセンサスをつくること**と両輪だと思う。このように、単なるプロモーションでは売れないのではと感じており、この先どうしたらいいかというのが課題である。

ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築

一般社団法人若狭高浜観光協会 吉岡 久氏

高浜町は福井県の西の端に位置している。高速道路が開通し、大阪京都神戸から 2 時間圏内にある。人口は 11,000 人程度で、貝殻が砕けてできた砂浜ととても透明な海が自慢である。海水浴が盛んで昭和 50 年代には 150 万人が訪れたという統計もあるが、去年は 20 万人を大きく割った。民宿数が日本一の海水浴の街だったが、こちらも減っている。原子力発電所という一つの事業所に寄りかかっている地域経済の現状がある。



そして、我々はビーチマリーナの国際環境認証であるブルーフラッグの取得を目指している。これは、ヨーロッパを中心に 30 年くらい前から始まり、世界 50 か国 4000 か所の海岸が認証を受けている。日本では、認証を行う団体の運用体制ができていないためにまだ認証されている海岸はない。具体的な取組内容としては、**33 の認証項目に対応すること**である。ビーチにおける行動基準はルールブックでの条例化により具体的な内容を決めていく。また **5 つ以上の環境プログラムを実行する**必要があるため、**高浜の海を舞台に提供できる仕組みをつくること**も課題である。さらにブルーフラッグ取得活動の**認知度向上**も必要で、町内でシンポジウムや説明会を行ったり、町外で広報営業活動を行っている。来年春に**ブルーフラッグ認証を取得すること**、**高浜の海の目標像を共有し、海のブランド化で地域の魅力を向上させ、住民・移住者を元気にしていくこと**が目標である。

課題として感じるのは、2つある。1つ目は、ブルーフラッグに関する**認知度が低いこと**。関係事業者の意識や価値観が旧来のままであり、住民への海の存在感をもっと高めたい。そのために地域住民が高浜の海を大切にするための活動に参加する場面をどう作るか。2つ目は、**町全体で海を守り育てる体制をいかにつくっていくか**。これまで海浜関係者が海の掃除など維持管理を行ってきたが、現在は高齢化で体制維持が困難な状況である。対して町民はきれいな海に慣れてしまい、海へのありがたみが薄れてしまっている。そして水上バイクやサーフィン利用のルールがない。このような状況で、町全体で海を守り育て、海を活用した地域振興に取り組む必要がある

変化としては、今までは観光事業者という高齢の方が中心だったが、ライフセーバーなどの若い世代や地域の学識経験者の方々等、今まであまり付き合いがなかった方々と連携がはじまっている。海水浴では、カヤックと新しいアクティビティメニューの商品作りが始まっている。さらに国際環境認証ということで、海外に目を向ける方がいる。また同様にブルーフラッグ認証を検討している他の5か所とのつながりもできはじめている。

高浜町まちづくり課 主査 米川浩司氏

行政側からとしては、**町民が海をどのように思っているかをもち意識**して、高浜町に対する愛着をブルーフラッグのプログラムでやっていきたい。

里山と海を結ぶ「ひみ森の番屋」地域内エネルギー循環事業

越の国自然エネルギー推進協議会 会長 竹平政男氏

8年程前から地域住民との薪の流通を行っている。越の国自然エネルギー推進協議会が始まったのは5年程前である。地域の人々が伐採した木を燃料として流通させるといった、森林整備と地域経済の活性化を目的とした「木の駅」もあり、そこで薪ストーブと薪ボイラーを広めようとしていた。氷見には温泉宿が海岸沿いに多くあるため、その温泉宿に薪ボイラーを導入し観光客を呼び込む。北陸新幹線の開通、そしてカーボンオフセット等も含めながら取り組んでいる。皆でこういうことをしたい、と話していたアイデアを実行に移したのが、今年の協働事業であった。



2013年度の事業内容としては、自分の山やチェーンソーの使い方がわからない地元のおじさん達に集ってもらい、木こりに伐採の仕方を教えてもらう講習会を実施した。この時は軽トラ15台程が集まって土場まで運んだ。ボイラーについては、オーストリアのエタ社というメーカーのボイラーを使用し、一昨日ようやく火を入れて動き始めたところ。3年前にオーストリアで地域の熱供給システム展示会が開催され、日本への参入を検討しているというエタ社の社員と話したのがきっかけであった。環境保全も重要だが、地域への雇用創出や地域活性化をキーワードに活動している。1年間活動してみて、伐採した木材は薪や炭とし、そこまで儲かっていないがなんとかやっけていけている。自宅には3年前から薪ボイラーを導入検討し、ボイラー室から地域熱供給を小規模に行っている。ボイラーの熱源は氷見の山から出てくることもアピールしている。伐採しているフィールドの氷見市上田地区には薪ストーブやタケノコを販売している金属加工の事業者さんや森林組合もあるため、わからないところなどは彼らからアドバイスをもらったりしている。

今年の取り組みではカーボンオフセットを行っており、詳細は担当から説明を行う。また木の駅を活用しても山の活動にあまりつながらないため木の駅側からもなんとかしてほしいという話があり、色んな企業への聞き込みを行い資金調達にも繋げる活動に取り組んでいる。これらのことから**氷見市は地域としての盛り上がりが見え始めている**。

木の駅プロジェクトや、ひみ里山杉活用協議会のシンポジウムが新聞に掲載された。木の駅プロジェクトでは我々ボイラー側が苦戦しているが、地元のおっちゃん達は「お前らはボイラーを早く完成させろ。山に木は切りに来なくてよい。おれたちは地元で NPO 法人化して自分たちで回すから」と地元は地元で一生懸命やってくれている。ひみ里山杉活用協議会は代表者が氷見市長、事務局が地元との材木屋からなる協議会で、氷見に植樹されている杉の商品化とブランド化に取り組む活動で、自分たちの利益追求だけでなく、仲間を作りみんなで一緒にやらなければという思いを大切にしている。山主や温泉の関係者が 130 名くらい集まった。市長との本気のディスカッションなど、どんどんそういう機会を増やしたいということはみんなが思っていることだと思う。これらが今年の事業を引き継いで今年取り組んだ内容である。

課題は薪の需要を伸ばすことと、上田地区中心の取り組みを市内に広げること。また理事長は森の番屋の認知度を高め、会員の数を増やすことで活動を推進したいと話している。

越の国自然エネルギー推進協議会 理事 中川 透氏

照明を木質ボイラーや LED に変えることで「低炭素化」になる。国内外でも企業が自社の努力で CO2 を削減しているが、自社で出来ないものを資金提供して、他の里山保全など里山森林の能力を高めるための、埋め合わせる活動がある。それがカーボンオフセットである。オフセットされたこの薪を購入し、ボイラー等に利用するとクレジットに繋がる。行政も関わっている場合もあり、出来たら行政が入っている方が良い。これは CO2 を排出している側のお金がうまく循環するひとつの手法であり、着手し始めた。

温泉街の年間の化石燃料代が、経営を圧迫していることが環境省事業の調査で分かった。木質ボイラーを導入すれば、燃料代が削減でき、里山の木も燃焼して活用できる。国内に普及している木質ボイラーは価格が 1 億円と高価なため、CSRとして企業にカーボンオフセットとして使ってもらえるのではないかと考えた。それがきっかけとなり、越の国自然エネルギー推進協議会は中部カーボンオフセットに参加している。

課題は北陸でクレジットが進んでいないこと。氷見は氷見産のクレジットを利用しなければいけないが、氷見市役所をその気にするためにカーボンオフセットの交流会を氷見市役所で行って、実際に氷見市で導入されている薪ボイラーの見学会も同時に行った。しかし行政もまだ環境の市場メカニズムで地域起こしが出来るか不安に思っているため、さらなる行政の巻き込みが必要である。

■グループワーク

5 グループに分かれてのグループワークを行った。「公共性」と「経済性」の視点で、各事業の課題を整理し、現状の収支計画、採算性、資金調達の可能性、市民への共感、認知度向上、行政の巻き込みと言った課題について意見を交わした。現状の課題の改善、今後の事業展開を検討するためのアドバイスや提案を抽出した。



〈各グループワークの成果報告〉

グループ 1

「リユースびんを活用し循環型社会を構築する『めぐる』プロジェクト」

NPO 法人中部リサイクル運動市民の会 代表理事 永田秀和氏

普段我々が考えないような「めぐる」の売り込み方などに関するアイデアを頂いた。1 つ目に「めぐる」の食品リサイクルとリユースびんの部分のみを**ストーリーとして売り込む**。2 つ目に食品リサイクルとリユースびんを切り離して、お酒の中身で勝負できるよう**コンセプトを消費者に伝える**こと。どんなコンセプトにするかを、例えば学生と連携して語ってもらうのも面白いのではとのことであった。3 つ目に**イメージを大切にする**。生ごみのリサイクルという表現も改めて考え、消費者に美味しいと感じてもらえるラベルや表現に出来るよう一度整理をすること。4 つ目に飲食店しかターゲットとして考えていなかったが、**フェアトレードや有機野菜を扱っているお店をターゲットとして見直す**こと。感想は、普段は同じような思いを持ったメンバーとリユースの良さなどについて話しているが、そこから外れないと、**商品が一般化されるのは難しいこと**を感じた。

グループ 2

「リユースびんを活用し循環型社会を構築する『めぐる』プロジェクト」

プロボノ 星野和平氏

主な意見として次の3つの具体的な意見があった。1 つ目に「めぐる」を購入する上での**具体的な貢献度の提示**。「めぐる」を買うことでどれだけ貢献できるのか、購入者に対する**客観的な数値での見せ方が大事である**とのこと。例えば QR コードを入れて活動内容やリユースの現状がわかるようにする。1,600 本と少ないため、プレミアにすることでブランディングする。2 つ目に**リユースの教育活動**。「めぐる」を使って教育現場にリユースを説明するという活動も合わせて実施するというもの。これまでも見学会前のリユースセミナーは実施している。3 つ目に愛知県内で**リユースがまわるようなマーケットの検討**。少なくとも愛知県を席卷するくらいのイメージでないとビジネスとしては難しいということ。そのためには**マーケットを決める**必要がある。価格設定ですべての関係者が WIN-WIN となるようもう一度再考してはということであった。本質的なご意見を頂き、感謝している。

グループ 3

ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築

一般社団法人若狭高浜観光協会 米川浩司氏

事業の良い点としては将来像をしっかり持って取り組んでいることである。今後の活動へのアドバイスは主に 3 つあった。1 つ目は、**海と山は繋がっているため今後は里山里海の活動にも取り組む**こと。2 つ目は、**海**の**海産物や農林での食のアピール**すること。3 つ目は、色んなところを使った**学習型観光の実施**。低年齢層から高齢層まで、観光しながら地域のことが学べ、そしてそれに合わせて高浜の良いところを紹介する**高浜百物語をつくる**こと。

個人的に一番心に残ったことは、高浜やブルーフラッグのことを**魅力的に PR するプレゼンカが大事だ**ということである。今後は魅力がより伝わるようにしっかり取り組みたい。グループワークでは自分が持っていた目線とは違う目線で意見を頂けた。

グループ 4

ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築

一般社団法人若狭高浜観光協会 吉岡 久氏

様々な新しいプログラムの具体的なアイデア、意見交換を行った。主なものとしては**子どもにブルーフラッグのことを語ってもらうこと**、**都会の子ども向けの海のプログラム提供**すること、**海への漂流物を活用した交流事業の実施**、有名アーティストを呼んで浜辺で行うフェスなどの**高浜のマーケティング**、アンケート実施による**都会の人の観光ニーズの把握**、とにかく新しいものを持ってきて成功モデルをつくり**地域住民を牽引して進む**こと、などである。意見交換をして、**環境教育は武器になる**と感じた。

グループ5

里山と海を結ぶ「ひみ森の番屋」地域内エネルギー循環事業

越の国自然エネルギー推進協議会 理事 中川 透氏

主に3つの項目に対し様々なアイデア、意見が出た。1つ目は、氷見の自然を活用したプログラム作り。里山資本主義を参考にし、氷見の特徴を活かすこと、木の伐採だけでなく、地域に行くことでさらなる魅力を感じてもらう環境を作ること。2つ目に連携。氷見の水と海の幸、バイオマスと自然資本の魅力や情報を地域内でしっかりと共有し、地域で一体となって連携し取り組んでいくこと。また広域における、行政区間を越えた連携。飛騨から越中、能登といった「飛越能交流」。3つ目に氷見で情熱的に活動できるような人材を育成すること。氷見で常駐して活動する人材が不足している為、人材育成にも力を入れて行く。そして成功した人材育成プログラムがあるところは、県や市のエネルギービジョンが固まっているため、他団体と連携し氷見市へ提言するといった意見があった。最後に次年度のカーボンオフセットに関する補助金情報もあり、今後も頑張りたいと感じた。感想としては、地域づくりのベテランの方が多く勇気づけられた。是非氷見にも来て頂きアドバイスをもらいたい。このような機会は非常にありがたい。

■まとめ 環境省中部環境パートナーシップオフィス チーフプロデューサー 新海洋子

全体の中で次の共有キーワードがあると感じた。「市民への伝え方」「違った視点でみる」「行政の巻き込み」「教育・学習」であったように思う。他、いかにマーケットを作っていくか、他市町村との連携や拡がりや指摘もあった。

まとめとすると、これからその提案や意見、アイデアを具体化していくか、ということである。来年またお目にかかる機会があった際に、「『めぐる』はこんな取組をして売り上げが上がったんだ」、「ブルーフラッグ取得してあと、こうやって観光客を増やそうと計画しているんだ」といった発展性のある変化の共有をしたい。EPO 中部は、これまで課題の抽出ばかりしてきたが、課題を改善したアイデアやノウハウを蓄積する機能を充実させたいと考えている。ブルーフラッグ取得事業が昨年10月に実施したシンポジウムでは、三重県の鳥羽市などを中心に、三重の地域資源を活用した地域づくり、地域産業づくりをしている三重大学の先生を講師に招いた。事例の紹介をしていただいたが、それぞれ手法や得意とする領域が違ってとても刺激的な情報交換の場になったと聞いている。三重大学の先生は、ブルーフラッグの手法を鳥羽に持って帰りたいと話し、高浜町の町長は鳥羽の手法に刺激を受けた、と話した。経験交流によつての学び合いは重要だと思うので、EPO でもこのような場を開催していくが、ぜひ今日は名刺を交換して、日常的にも情報交換できる関係性を作っていただけると嬉しい。我々は、社会の担い手、変化の担い手であり、大胆なアクションをしなければいけない。

②ダイアログ2 プロボノの可能性に迫る…サスビズの成功に向けて 会場：1104

[目的]

サステナブルな社会をつくるためには、「斬新な発想」と「積み重ねた経験」のコラボレーションによる「新たな社会価値の創造」が必要である。プロボノはそれを可能にする「策」である。企業の視点から見ると、社員の「生きた研修」の場となり、会社の財産である「人材の育成」となる。NPO の視点から見ると、「足りないものが補完」され、社会影響力を高めることができる。このマッチングを成立させ、プロボノの価値を社会に根づかせるか。多様なステークホルダーと議論する。



[プログラム]

●趣旨説明

●事例紹介

[企業の視点から]

NPO 法人中部プロボノセンター/住友理工株式会社の取組

ブラザー工業株式会社の取組

[サステナブルビジネスを立ち上げた側の視点から]

NPO 法人メタセコイアの森の仲間たちの取組

社会福祉法人むそうの取組

[録音でのメッセージ]

アイシン精機株式会社の関わりについて

●課題提起

プロボノとは…参加者で共有

プロボノ(ワーカー)の可能性と有効性の整理

・社内にどう根付かせるか

・地域にどう根付かせるか

●ステークホルダートークテーマ「サステナブルビジネスを成功させるためには、プロボノの存在は必須である。」

・企業が参画可能なスキームをつくるにはどうしたらよいか。

・地域ニーズはあるのか

・派遣する側、派遣される側のマッチングサポート体制をどのようにすればよいか、

●意見交換

・金融機関の取組

・中小企業がプロボノワーカーを派遣することはできるのか

●まとめの時間

[参加者] 17名 (他録音メッセージ1名 スタッフ3名)

〈話題提供者 5名〉

【愛知】戸成司朗氏 (NPO 法人中部プロボノセンター代表/住友理工株式会社 CSR・社会貢献室長)

【愛知】間瀬康文氏 (ブラザー工業株式会社コーポレートコミュニケーション部グローバルブランドグループ企画管理チーム・マネージャー)

【岐阜】興膳健太氏 (NPO 法人メタセコイアの森の仲間たち代表理事)

【愛知】千種隆昌氏 (社会福祉法人むそう)

【愛知】杉田英俊氏 (アイシン精機株式会社総務部さわやかふれあいセンターセンター長)

〈出演者 13名〉

【愛知】岩崎雅之氏 (環境パートナーシップ・CLUB 総合事務局部長)

【愛知】山田厚志氏 (株式会社山田組代表取締役)

【愛知】鳥原久資氏 (株式会社マルワ代表取締役)

【愛知】鈴木修一郎氏 (株式会社ウエストボックス代表取締役)

【愛知】神戸千隆氏 (株式会社デンソー経営企画部経営戦略室長)

【愛知】八橋利明氏 (大日本印刷株式会社)

【愛知】柴田修氏 (日本ガイシ株式会社 CSR 推進室室長)

【愛知】加藤美奈氏 (プランニング・ラグーン有限会社)

【愛知】安藤美香氏 (名古屋市環境局環境活動推進課環境教育担当)

【愛知】酒向清治氏 (瀬戸信用金庫営業推進部 資産・経営相談グループ次長)

【東京】嵯峨生馬氏 (NPO 法人サービスグラント代表理事)

【愛知】片岡和則氏 (環境省中部地方環境事務所課長補佐)

【愛知】高田敏雄氏 (なごや環境大学事務局次長)

〈コーディネーター〉【愛知】村田元夫氏 (株式会社ピー・エス・サポート代表取締役)

〈スタッフ〉 田中耕平 (環境省中部環境パートナーシップオフィス ディレクター)

馬場恭子 (環境省中部環境パートナーシップオフィス コーディネーター)

[内容]

■趣旨説明 株式会社ピー・エス・サポート 代表取締役 村田元夫氏

この地域でサステナブルビジネス (以下サスビズ)、いわゆる環境系事業型 NPO が、どうしたらより多くの地域で生まれ、そして持続可能な事業になるかが大切。サスビズを運営するには NPO 的な活動だけでなく、企業からのプロボノ支援が必要で有効ということが見えてきた。サスビズを寄ってたかって支援する仕組みをこの地域につくりたい。支援する担い手は、コンサルタント等の専門家に加えて銀行、大学、行政、先輩事業者、プロボノを想定している。プロボノ支援は様々なアドバイスがもらえて良いという事業者からの声も聞こえている。同時に支援するプロボノも、参加すると新しい視点も得られ、社員研修にもなるという声もある。一方、このプロボノの活動は、十分に広まっていない現状である。

従って今日は「このプロボノ支援を広げるためにどうしたらいいのか」ということを議論したい。私は、企業がプロボノ支援



を始めるにはいくつか壁があるという仮説を立ててみた。CSR 担当者、経営者の想いから始まり、最後に会社組織としてプロボノが位置づけられるには、いくつかの壁がある。第 1 は、人的壁。特に役員クラスへの理解をいかに得るか。第 2 は、就業時間外のプロボノ支援だけでは中々広まらず、会社の就業規則を踏まえた上でプロボノ支援をどうするかという壁。最後は派遣することで企業が得るメリットがないとプロボノは広まらない、ということで経済的価値の壁。今日は事例発表を聞いてもらいながら、プロボノ普及の壁がどこにあり、課題をどうしたら解決できるのかについて話し合いたい。

■ 事例紹介

NPO 法人中部プロボノセンター 共同代表理事/

住友理工株式会社 人事総務本部 CSR・社会貢献室長 戸成司朗氏

● プロボノセンターの事業

NPO 法人中部プロボノセンターでは「プロボノメンバー育成研修事業」「NPO へのパッケージプログラム提供事業」「NPO へのメンター派遣事業」の 3 つを行っている。当団体のビジネスモデルは、企業から人材を預かりお金も頂く。そして企業に CSR の推進と人材育成を請け負うことでお返しとする。

そしてプロボノの NPO 支援で社会課題を解決していくことです。

〈プロボノメンバー育成研修事業〉

企業人がいきなり NPO に行くともまず上手くいかない。それは社会の視点、経営の視点と考え方が違うから。そのため 3 か月間で NPO をメンバーに理解させるために徹底的に教育する。講師は大学教授、NPO の代表、企業の幹部など。やはり企業に入りその事業部 1 本で仕事すると、社会で何が起きているのか、どんな課題があるのかということに対して浮世離れしてしまう。そのため社会、アジア、世界がどう動いているのか、その中で日本の立ち位置、さらには中部における特性を考えてもらう。そしてプロジェクトを進行する為のマーケティングとプロジェクトスキルに関する基礎知識も教える。最終的に彼らに意識づけるのは、ソーシャルイノベーションを起こすイノベーターが使命だということ。

〈NPO へのパッケージプログラム提供事業〉

研修終了後にメンバーのスキル、特性を組み合わせプロジェクトを編成する。「事業計画立案支援」、「ブランド戦略支援」、「業務改革支援」、「業務マニュアル作成支援」、「協働プレゼン支援」の 5 つのメニューを持っており、団体が希望したプログラムを 6 か月かけて提供する。

〈NPO へのメンター派遣事業〉

提供したプログラムを軌道に乗せる為に、メンバーの企業役員を 1 名メンターとして派遣し 1 年相談に乗ってもらう。

● 住友理工(株)のプロボノプログラム

従業員の知的ボランティアとしてのプロボノプログラムであり、人材開発のプログラムとしても行っている。2013 年からスタートしており、総合職から基幹職になった社員から役員推薦で 5 名、公募が 5 名、計 10 名で 1 年目は行った。今年度は 2 期目で、役員推薦が 4 名、公募が 2 名の計 6 名となっている。又メンバーには他社からの参加の社員も加わります。

具体的には 1 期生は「NPO 法人全国福祉理美容師養成協会の『癌患者の為の医療用ウィッグの事業化戦略』」のプロジェクト支援を行った。このプロジェクトの調査分析をした結果、サプライチェーンと資金計画に弱点を発見した。そこで中国での材料調達、試作品の開発、資金計画作成を行った。

● まとめ

推薦組は最初積極的ではなかった。しかし 6 週間の研修を終え社会への関心度が高まり、プロジェクトメンバーは

限られた時間の中で熱心に活動した。そして彼らは自分で考え実現できることから大きな達成感を得た。会社だと自分が考えたことが通りにくい。そのため「本当に楽しかった」というのが彼らの感想だった。今後の課題として中部の企業にプロボノの理解が進むかどうか。今日参加頂いた中部の企業の方の皆さんには、是非 NPO 法人中部プロボノセンターに人材を預けて、わずかなお金で人が育つという投資をして頂きたい。NPO サイドの問題としては、社会課題をいかにビジネスモデルに乗せられるか。実は中部地方、特に愛知県は NPO が弱い。そういう意味で愛知県の NPO をどう育てて行くかも一つ課題である。また 1 期生の報告が聞きたいということで、社長以下上司の役員、そして支援された NPO の代表も参加する社長報告会があるが、こういったトップマネジメントの理解がプロボノには不可欠である。

ブラザー工業株式会社 コーポレートコミュニケーション部

コーポレートブランドグループ企画管理チーム・マネージャー 間瀬康文氏

●東海若手起業塾

ブラザー工業(株) (以下ブラザー) は 2008 年に創業 100 周年を迎えた。創業の精神“*At your side.* ”と「チャレンジ精神」という言葉に沿った社会貢献活動を検討した結果、東海地域の若手起業家を支援する「東海若手起業塾 (以下起業塾) 」を支援することとなった。起業塾は、お金を出す支援ではなく、人脈のネットワーク、メンターに入ってもらい事業型 NPO を支援するという活動。7 年経って卒業生の起業家も 30 名弱となり、一部は起業塾の運営にも関わっており、起業家支援のコミュニティが出来つつある。

●プロボノプログラムのスタート

この活動を会社の成長に活かすために、プロボノを 3 年前にスタートさせた。参加者から「参加してよかった」「もっと貢献したかった」という意見があった。そこで人材育成のプログラムとしての実施を人事部に提案したところ、「人材育成プログラムとしてプロボノがベストであるという判断は现阶段ではできない」という意見だった。確かに、起業家の選定は「起業塾を活かせる起業家か? 」という視点で選考する以上、従業員とのマッチングは 100% 合うとは限らない。しかも 4 名しか参加できないのでは人事部の施策としては難しいとのことだった。ただ教育効果は認められるので、30 時間の業務時間と 50 時間程度のボランティア参加というプログラムで従業員を募集している。

ブラザーとしては「起業家の支援を通じて、今後のキャリアアップにつながる学びの機会が得られる」「*At your side.* ”な視点で課題に向き合い、その解決策を練るプロセスを体験できる」「起業家の支援を通じて、あなたのスキルが社会に生きる実感を得ることができる」をメリットと位置づけこの活動を進めている。

●活動の PDCA

ただし、起業塾でも活動をうまくデザインしないとプロボノの貢献度や学びは高まらない。それは起業家の事業のステージや支援が必要なタイミングとの兼ね合いがあるから。そこで今回は起業塾の実行委員会メンバーでもある、公益財団法人あいちコミュニティ財団の「あいちの課題深掘りファンド (以下深掘りファンド) 」と連携した。

代表の木村さんの課題認識も、起業家がコミュニティの共感を得て支援を獲得するには、まずは取り組む課題の見える化が大事というもの。これはブラザーで言う“*At your side.* ”そのもの。ここが重要な学びのポイントだと思っている。

3 年目の今年度から、プログラムの前段に「深掘りファンド」への参加を入れた。4 人のプロボノは、起業家とともに、取り組む社会課題を調査して見える化する過程でこのアプローチを学ぶ。そして後半、起業塾で選考された具体的な起業家の個別の支援に入る 2 段階の建て付けとした。こうした PDCA を回すために、協働する NPO 団体の意見は重要であった。昨日メンバーのふりかえり会を行ったが、現在のところ良い成果が得られている感じである。

●議論の軸の整理（まとめにかえて）

私は個人的に、もう少し広い視点で考えたいと思っている。

まず企業サイドの視点で言えば、業務以外の活動を体験することで人材育成につながるプロセスは、プロボノのアプローチが全てではない。うまくデザインすれば社内外のボランティア活動でも実現できる。だから私は「プロボノでなければならない」とは思っていないし、ほかの企業の皆さんに「プロボノ」を盲目的に推奨しようとは思わない。各企業の人材育成のニーズに照らし合わせて検討する必要があると思っている。

次にサスビズを推進するコミュニティに参加する者としての視点で言えば、本来の議論の目的である「サステナブルなビジネスの推進に企業セクターが貢献できるアプローチとして、従業員育成と連携させたプロボノの「ような」活動をどう活かすか？」という命題に立ち返って、それぞれのプロボノの事例を検証する必要があると思っている。

その議論において、「社会セクターは、どれだけ「プロボノ」人材を必要としているのか？」「この地域に、ブラザーやそのほかの先駆例を実施可能な企業は、それほど存在しているのか？」という、課題の見える化や、埋蔵資源のざっくりとした仮説設定をしなければ、何の議論も始まらないと思っている。サスビズの検討の場での議論において、この設定なくしていかにプロボノが人材育成に有効であるのかを共有し、認識しあっても、一向に前には進まない。これは、今まで同様な議論の場に参加して共通して感じるもやもや感であり停滞感である。

この停滞を脱するためには、企業サイドの役割としては、企業の中での人材育成ニーズを的確に理解し、プロボノなどで得られる育成成果をマネジメント可能な指標で見える化し、その投資効果を検証し、その事例を開示することだ。そして、サスビズを進めるコミュニティ全体の課題としては、こうした企業の取り組みの結果引き出せる人的資源の全体量と、その活かし方と、その結果の社会の変化を、分かりやすく示すことに労力を費やすことだと思う。そうしてはじめて、埋蔵している企業の人的資源をサスビズにつなげようと経営者も共感するのだと思う。

つまりは、社会起業家の皆さんが取り組むのと同様に、課題と成果の見える化が重要なのである。

NPO 法人メタセコイアの森の仲間たち 代表理事 興膳健太氏

プロボノの受け入れ団体側となる。団体としては15年程活動しており、代表理事となって8年。事業規模は3,500万円程で委託事業と自主事業で半々程。プロボノ企業は三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング(株)というコンサルティングの会社。NPO 法人ソーシャルベンチャー・パートナーズという団体で支援先を公募しておりこれに支援をもらった。

●概要

実は事業も始まったばかりで、プロボノ支援側と受け入れ側も初めてのためお互い手探り状態から始まった。プロボノ支援では「獣害対策の調査とその白書の作成」、そして「事業計画をブラッシュアップするコンサルティング」をお願いした。プロジェクトは10月から始まったが、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング(株)は年度末が繁忙期で、結局東京と郡上で1回ずつ会い、後は特定の人と個別に相談しながら進んだ。しかし獣害に関しては専門性が高く、3ヵ月余りを情報共有・現状把握の時間と結局白書は作成できず、フローチャートを整理してもらったのみとなった。

●プロボノ支援の成果

組織を客観視し事業整理が出来たことは成果。一番の成果は担当プロボノの方が個人的に団体に深く関わってくれたこと。猪鹿庁という里山保全の任意組織に参加し、今は仕事を休みにして来てくれて仲間として活動している。

●プロボノ支援の課題

団体の課題、ノウハウ、人材、フィールドを整理してもらい、それを活かした事業の提案も頂いた。ホームページを整理する組み立てのアドバイスもあったが、そこまで手が回らないのが正直なところ。取り掛かる必要があるのはわかるが

すぐには着手できなかった。理由は優先順位が低いから。利益を生む子どもキャンプ事業の優先順位は高くなり、同時並行で猪鹿庁の里山保全事業部を回していくという中でスピードについていけなかった。またマンパワーが足りないのも NPO の課題。そして戸成さんから事業計画を持った NPO が少ないという話があったが、そこは痛感している。間瀬さんも言われたように、企業がプロボノとして NPO に興味を持つことは嬉しいが、NPO 側が育っていない問題があると感じている。

また、人材育成よりも利益を返せる存在になりたいと感じている。ただ一方で NPO は右肩上がりに成長する組織ではない。事業計画でも年収目標を決めるが、その目標金額の発展は考えずにその年収を維持できるかを考える。そのため企業は付き合い難いと思うが、そこを理解してもらえ企業とは是非お付き合いをしたい。資源はお肉、自然の環境など、暮らしの部分の豊かさは自信を持って提供できるため、そういう部分で関係性を作りたい。

社会福祉法人むそう なちゅふいーど たまごハウスびよびよ担当 千種隆昌氏

●概要

本業は障がいのある方でも自分らしく、地域の中で暮らしていけるようにということで、一軒家を借りてケアホームに住んだり、ヘルパーさんとお出かけしたり、また得意な事を活かした仕事としてラーメン屋、養鶏場等様々な活動をしている。そして半田市の里山は竹書を受けており、伐採後の竹を友好活用するためにも竹ペレットにして、ストーブなどの燃料とする事業を考えた。しかし事業が始まっても竹ペレットが固まらない、生産量や販売先もわからない状態だった。そこで今年プロボノの支援を受け、安定生産と販売先を検討しながら、事業として成り立つかジャッジすることを目標にスタートし、アイシン精機(株)、中小企業診断士、名古屋大学のプロボノに入ってもらった。



●事業の進捗

プロボノ支援は 10 月からスタートし、竹ペレット生産の現場見学をしてもらいながら事業の課題や状況などを整理していき、それに伴う解決方法を考えていった。竹にリグニンという物質が入っており、それが熱で溶けて固まり糊の役割となりペレットが出来るということがわかった。そしてペレットには竹の水分含有量の条件の他に、部屋の温度・湿度など、企業だったら当たり前に行っている生産管理の方法、製造工程毎の品質保証など、そういった欠けていた部分を一つ一つ学んでいる状態。そしてプロボノのおかげでようやく安定した竹ペレットの生産が出来るようになってきた。竹ペレットの販売についても、他の燃料のメリットとデメリットと比較して消費者目線で考えるという意見をもらい調査した。3 月までに原価、販売価格がいくらなのかを整理し、事業として成立するかジャッジをするという段階にきている。

●まとめ

竹ペレットをなんとかしたいという気持ちはあるが、どう上手く活用したらいいのか、どう作れば良いのかがわからなかった。事業があまり進まなかったかもしれないが、企業や専門家の方にアドバイスを頂きながら一つ一つ原因がわかるという実感を持つことが出来た。自分がプロボノという言葉聞いたのはこの事業で初めてだったため、社会福祉法人、NPO 等、まだ言葉自体は浸透していないと思うが、今後もプロボノの展開を広げて行けたらと思う。

●プロボノについて

数年前に社会貢献の雑誌を読んだ際にプロボノについて知った。こんな社会貢献のやり方があるんだということでインターネットでも調べた記憶がある。今年は社会福祉法人むそうのプロボノとして現場に入っているが、企業人と団体職員の考え方が全然違う。我々として常識的な考え方が役に立ったり、反対に団体で常識的にやっていることを我々が知らなかったりする。具体的には、経営的な考え方。例えば事業を始める際には成功するスキームを考えるが、逆に最悪のシナリオやリスクについても考えておかななくてはならない。反対に事業への気持ち、夢が非常に強く、達成に対するモチベーションの高さは団体から学ぶことがある。気持ちを強く持ちながら事業を実施するために我々のノウハウ、強みを活かし、弱みを補い合えば良いものが生まれる、そんな期待を込めて楽しく関わっている。

●行ったアドバイス

またプロボノとしては、竹ペレットを作り、どんな市場でいくら販売出来るのか、そのような点に対してアドバイスをした。例えば竹ペレットを燃料で使うのであれば化石燃料である石油等を凌駕するストーリーが描けるのかどうか。その辺りをしっかり考え、売れるかをまずは考える。また安く売るために原価低減が必要。その辺の基本的な原価についても検証する必要があるということを伝えている。NPO等は寄付があったり無償で手伝ってもらえたりもする。それが永続的にできればいいが、ある時点で人件費、仕入れ値とお金がかかることもあり得る。それを踏まえた上でも商売が成り立つかどうか。そのようなリスクについてアドバイスしている。ただし言うのは簡単だが行うのは非常に大変である。5年、10年先まで考えた継続事業とするには、しっかりした事業計画が重要となる。その辺は分かってもらえた。

●社内でのプロボノの浸透度、説明について

社内でもプロボノという言葉は浸透していない。しかし自分のスキルを社会に活かす貢献活動は、アイシン精機(株)内ではプロボノという言葉を使わずしてこれまでもやっている。例えば被災地で漁業に関する機械を直したり。しかし今後無償で休日に、あるいは定年を過ぎた後に、活動することは、現実的にいるかは疑問。

●中間支援団体に期待すること

プロボノという言葉を含めた普及活動。社会課題としてのプライオリティが高くなければ、動かない企業が多いのではないと思う。中間支援団体でしっかり訴求していただいた上で、企業がプロボノに参加する、そんな形、活動を今後お願いしたい。またプロボノ活動の結果に対し目に見える効果・成果がわかるような仕組みができるとさらに企業も動きやすくなるかもしれない。

●最後に一言

今日は別の仕事が入って参加できず申し訳ない。やはり自分で色々やってみることが大事。やってみると、自分自身の勉強にもなるし、活動の楽しさも体験できる。今日の参加者の皆さんも、是非ご自分で体験されると良いと思う。今後は、社会福祉法人むそうのように、それがどんどん事業化していく。それが自分にとってやりがいにもなる。是非皆さんも一緒になってやって頂きたいと思う。

■ 発表者のまとめ

株式会社ピー・エス・サポート 代表取締役 村田元夫氏（コーディネーター）

発表の中であった、プロボノが浸透するための弊害となっている壁について以下のようにまとめた。

NPO 側の壁	プロボノ側の壁	企業側の壁
<ul style="list-style-type: none"> ・ビジネス化に対する苦手意識がある ・事業化を担う組織としてまだまだ育っていない所が多い ・ビジネスの常識が中々通じない（リスク管理、原価管理） ・夢が先行している ・なんとなく勢いで事業にチャレンジしてきた ・支援者に対して経済的メリットは提供しにくい ・アドバイスをアクションに変える人材不足 ・スピード感についていけない 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の課題が見えていない ・NPO の価値観が見えていない ・支援先の実態やスタンスを理解するのに時間がかかる ・アクションにできないアドバイスも多い ・NPO の夢を共有できていなかった、共有するのに時間がかかる ・お金がもらえるメリットがない 	<ul style="list-style-type: none"> ・トップマネジメントの理解不足 ・人事部の予算がとりにくい（人材育成効果は見込めるが直接的な事業の効果は非常に不安定） ・なぜ社会起業家でないといけないのかという説明がしにくい（他にも同様の教育効果がある） ・プロボノの効果が見える化できない ・周りの企業が動き出さないと動かない ・プロボノという言葉が浸透していない

■ 意見交換

嵯峨氏：個人ボランティアの参加者が 5～6 人で一つのチームを組み NPO をサポートする、そんな活動から始まった。その中の一部として、パンフレットの裏側にパナソニック(株)と(株)三井住友銀行のロゴが入っているが、会社の CSR 活動として社員だけでチームを組みプロボノを行う。支援先は会社の CSR 方針に沿う。例えばパナソニックだと子ども分野、環境分野。こういう分野に対する活動をする団体を、プロボノで支援する。そんなパナソニックチームや三井住友銀行チームをサポートする活動を 9 年程行っている。

そしてコメント前に私の話を二つだけ。ある会社でランチョンセッションがあり、私が呼ばれてプロボノの話をした。一人の若者が興味津々で聞いていた。そして 1 ヶ月後くらいにその会社の方と話をすると、あの話を聞いた後に彼は辞めてしまったと言われた。話を聞いてスイッチが入り会社を辞めて自分の事をやりたくなくなってしまったそうだ。それ以降会社に行って話をする時は、私の話を聞いたから会社を辞めるとは絶対に CSR や人事部の方には言わないようにと必ず言うようにしています(笑)。これ、笑い話のようだが企業においては非常に深刻な問題。CSR プログラムで会社の外を見せたが故に、辞めてしまうなんてとんでもないという風に思われてしまう。

もう一つ、別の会社だが、プロボノを経験した方は会社を辞める傾向にあるのではという話がある。プロボノに参加しても辞めていない会社もあるため、一概には言えない。ただし疑似相関的にいくつかの理由が重なりそういうことが起こっている。会社がプロボノを導入するにあたり、プロボノで外の世界を見て視野が広がり業務の生産性が上がれば良い。しかしそれがきっかけで会社を辞められては元も子もない。ここに関しては、プロボノ推奨側はしっかりと応える必要がある。そこで、現在私からはプロボノ参加後のフォローを人事の方に行っていたくよう提案している。現状 NPO 法人サービスグラントが協働する企業は CSR の方が担当で、CSR のプログラムとしてやっている。そのため人事部は基本的にはノータッチ。プロボノに参加する社員は前向きな社員だが、その前向きさを会社がどう受け止めるか。その時に、プロボノ参加者が、プロジェクトの実施中や実施後に、半年に 1 回、3 ヶ月に 1 回程度でも、意見交換をする場を作り、そこを人事部がフォローしてはどうかと提

案している。プロボノ後に、会社がどう受け皿を作り、受け止めるのかについて補足のコメントがあれば頂きたい。

戸成氏：NPO 法人中部プロボノセンターでも、プロジェクト後もモチベーションを維持してもらうために、一定期間内に集めて情報提供を行うなどしている。

嵯峨氏：プロボノへの参加をきっかけにコミュニティ化に繋がっていると、会社の風通しの良さにもつながると思う。

間瀬氏：先程の CSR 部門がやっていることで一致したことがある。CSR 経営の位置付けは会社ごとで違うと思う。プロボノのメリットは、会社人と個人でのメリットと、同じ人間の中に二つのメリットが現れるが、どちらをフォーカスするのか。ブラザー工業(株)はチャレンジという要素を入れており、会社の視点で従業員に投げかけるので、会社の中でそのチャレンジを活かしてほしい。そのため会社人としてのアウトプットをフォーカスしているため、人事は避けられないというところがある。

嵯峨氏：ブラザー工業(株)で就業時間 30 時間を使うのは企業では珍しい。外資系企業だとそういうこともある。

間瀬氏：サスビズ側の課題からすると、お金を出してサービスをもらうよりも、少ないお金でも喜んできてくれる、そういう仕組みがサスビズ側は良い。そしてプロボノは、会社、個人として出す場合では議論が全然違うため、明確に分けた方が良いと思う。そうするとサスビズ側の課題に対し、少ない値段でサービスを提供してくれるという一番良い供給源は、必ずしも企業のプロボノではないと思う。そこを議論した方が良いのではないか。

嵯峨氏：プロボノ時間を有給の業務時間で見ると時間外で見ると、プロボノにかかる費用を会社が負担するかどうか、などにはさまざまなバリエーションがあってよい。例えば、会社としてプロボノにかかる運営費は出す、ただ社員の方は無給のボランティアで、使う時間も基本的には就業時間外…といった仕切り方もある。

間瀬氏：ブラザー工業(株)はさらにその中間。30 時間は許すが、さらにプラスしてボランティアもやる人は行っても良いと。

村田氏：間瀬さんの問題提起で、会社人か個人かと言う意味では、企業の会社人として議論したいと思う。しかしそれが理想的すぎるのであれば戦略的にその方向でなく、むしろ企業が見守るような個人ボランティア的な、そんなことで議論してもと思う。

間瀬氏：それは他の企業の情報と色々相談しなければ。

村田氏：そこを是非情報交換したい。

興膳氏：これ本来順番が違うのでは。NPO が支援してほしいから企業を探していて、そのお手伝いをしてほしいならわかるが、今は逆に企業が NPO を探している状態になっておりおかしな状態な気がする。この言い方は適切ではないかもしれないが都会的な気がする。もっと土着で身近に活動している人たちが、なんとかしたくて企業を口説きに行くが、駄目だから、中間支援組織と一緒にいくという形が理想だと思う。今の形は NPO を甘やかしすぎているとも感じる。

嵯峨氏：次は興膳さんや千種さん事例のコメントに移りたい。興膳さんの言うことがよくわかる。僕からするとアドバイスだけであれば NPO に対してそんなに役立つものではない可能性も高い。しかし企業人はアドバイスによって支援したつもりになる人もいる。NPO はやらなきゃいけないことを全部書きだしたら 100 くらいある。アドバイスをもらうと何が起るのか。やらなきゃいけないことが 101 になる。NPO のやることリストを増やすことになる。よっぽど気が利いて、10 個のやることを 1 個にまとめてくれるくらいの優れたアドバイザーなら良い。しかしやらなきゃいけないことの要求水準だけ上げて帰るアドバイザーでは中途半端。興膳さんは「組織をふりかえることが出来て良かった」と言うが、それは興膳さんが良い人だから言えることかも。時間だけかかり、やたらヒアリングと情報提供ばかりさせられる。これは民間企業でもそうだが、コンサルタントによっては、情報提供は多いがアウトプットがブアであることもあり、そうしたコンサルティングは満足度が低い。

戸成氏：嵯峨さんのご発言の通り。NPO 法人中部プロボノセンターも癌患者のかつらの事業では、たとえば中国のメー

カーとやりとりする文書まで全部作り、後はNPOがクリックして出すだけの状態。でないと、アドバイスだけならそれは大きなお世話になってしまう。それはプロボノではないと思う。

嵯峨氏：100人規模の巨大な組織ならコンサルティングも効く。まず支援する側としてはNPOがやらなきゃいけないことをリスト化する。そして重要なところから消していくことが大切だ。千種さんに尋ねたいが、社会福祉法人むそうの事業はラーメン屋、キノコ農場があったが、全体の事業の中で竹ペレット事業規模はどういう位置づけなのか。

千種氏：大体働く方が40名程で、それぞれラーメン屋、しいたけ屋などそれぞれの拠点でおよそ5〜6名くらい。位置づけとしてはうんぷう事業、養鶏事業、そして竹ペレット事業となり、事業規模としてはどこも同じくらい。

嵯峨氏：なるほど。支援内容を何にするかということも実は大事。プロボノでは、それなりの給料を貰い、かなりの知識や経験を持つ社会人が長期間関わることになる。これは時給計算したらかなりの金額となる。そのため支援する側が、何を支援するかと言うと、欲を言えば一番成果が大きいところ、社会的なインパクトが大きいところを支援する方が良いと思う。NPO側もプロボノに核心のど真ん中に入ってもらえるのは怖いので、メインでない事業、どちらかと言うと周縁的な事業を頼むこともある。しかしそうした周縁的な事業では、プロボノの時間を使っても支援先の状況は大きくは変わらない。例えば社会福祉法人むそうで、ラーメン屋が成功しているのであれば、その売り上げを1.5倍にするには、2店舗目を開くにはどうしたらいいのかについて考えた方が、実はもっと利用者（障害当事者）の数が増やせたり、利用者の賃金が上げられるインパクトが出せるかもしれない。そう考えると、「支援させてもらえるところをお手伝いする」というスタンスでは駄目で、どうしたらその支援先にとって一番大きなインパクトを与えられるか、支援する側も欲張った方が良い。

企業人と、NPOの人達が、目線を合わせるということが大事。共通点を見出せる点はどこかあるはず。そしてその点は「成果」だと思う。ピータードラッカーが、「非営利組織の経営」で、非営利組織の成果について書いている。営利組織、株式会社の成果と言うのはまさに利益、お金。これを増やす。では非営利組織の成果が何かと言うとそれは「人の変化」。つまり非営利組織が何か仕事をしたという時には、関わる人の暮らしに何が変わったか、その人が新しい仕事を見つけたか、その人の工賃がいくら上がったか、具体的な変化が起こらないと成果につながったとは言えない。ステークホルダーA、B、Cが非営利組織に関わる。関わることでAと言う人がA'という状態に、Bという人がB'という状態に、CがC'に変化する。これが非営利組織。いわば、人を変えずにはいられない、すごいポジティブなおせっかいを焼くのが非営利組織。その非営利組織のおせっかいをきちっと焼かせるためにプロボノは応援する。一部のステークホルダーに情報が伝わっていないのであれば、それはおせっかいがちゃんとやけていないわけだから、ウェブサイトを通して情報を伝える。その組織の生産性が低く一個一個のことを丁寧にやり事業が捌けないということであれば、組織改革をしてもっと生産性を上げる、つまり、もっと効率的におせっかいを焼けるようにしてあげる。非営利組織は、人を変えなきゃいけない。これは企業人でもわかる。ただしその単位が円ではない。こういう状態にある人が何人といったような指標だ。この成果＝人の変化に目線を合わせてくれれば恐らく企業人も、NPOの方も目線を合わせられる。企業側がプロボノをいかに活かすのか、そしてNPO側に対してもどういった支援が求められているのか、それぞれが今日のポイントとなると感じた。

村田氏：瀬戸信用金庫の酒向さんにも活動紹介をお願いしたい。

酒向氏：「せとしんプロボノプロジェクト」で、2年目の活動をしている。年度毎で行っており、事業者を2社募集し、半年間かけて支援していく。半年の支援は、瀬戸信用金庫のプロボノメンバーと事業者が就業後に集まり定例ミーティングをしながら課題解決をしていく。1年



目は課題解決。それで二つの事業者に対して4チーム作り、一つの事業者に2チームつく。1年目は手探り状態だったが、一つの事業者が課題解決を希望しそれに取り組んだ。昨年度と今年度、SROI（社会的投資利益率）という社会的価値を図りたいと。これはまさにAさんがNPOを通じてA'になったという変化量のこと。これはAがA'に変わっても、NPOとしても中々説明がし辛い。社会に対して良い事をしたと言うのでは中々上手く伝わらない。やはり営利企業のように、投資したことが何倍になったと説明できることによって自分たちのNPO団体としての活動が良いことだと説明できる。そんな貨幣価値換算をするお手伝いをしている。最後に成果発表会も行っており、一部外部の申込みもあり昨年は150名程が参加した。金融機関の人間はあまりNPOの話は聞かないようなイメージがあるかもしれないが、今年は、「同じ目線で話すことが出来たのがすごく良い」という意見があった。支援前に事業を知るために、何回も事業所に通い体験入学のようなことも行い、事業の理解をしたり、またステークホルダーの変化を測るために、NPOと一緒に出向いてアンケート調査を行った。そういった部分が理解に繋がった。そして最後成果発表会をすることで、NPOが多くの方々に広く周知できたということも喜ばれている。

課題は今後の広げ方。公募を会社の中で行っており、例え希望者が多くてもプロボノはそもそもボランティアだということで全員受け入れている。下手にプロボノを意義のある事にすると、参加し辛くなるのではとも感じている。基本的にはやりたい人は自分の意志で参加してもらい年代も中堅職員から1年目の人までいる。能力に差があるが、チームを編成して支援している。このようにプロボノを広げている。もう一つが、最後の報告会。そこで活動を知ってもらうことで2年目につながる。報告会に来てくれた支店長の部下や、1年目参加した同期の友達等、少しずつ注目されてきたので、プロボノの意義や意味を知らなくてもプロボノという言葉は多くの人に知ってもらうことが非常に重要だと思う。瀬戸信用金庫は職員が全部で1,300人~1,400人おり、その多くがプロボノという言葉を知るようになった。それは2年やってきた成果だと思う。

村田氏：瀬戸信用金庫のタイプは基本的には社員のボランティア精神で動いていて、企業はそれを見守ると言う感覚。少しブラザー工業(株)タイプとは違う。もう一度ここで議論したいことは、いくつか壁があるが、どこの壁を突破すれば今後一番うまく浸透していくのか。そこを共有したい。

間瀬氏：根本的な壁だが、さっき社会的インパクトというワードがあった。対価を貰わずに貢献するボランティアを行う理由は、やって良かったという「目に見えない価値」で決裁して動くから。会社でも、会社から製品を通じて社会にインパクトをもたらすことは一生懸命やろうとしている。その場合は対価として給料が出る。しかし売り上げではない、目に見えない社会的インパクトがあるから頑張れて、自分を成長したいと思えるルートがある。しかし会社も本業を通じて従業員をスキルをアップし、かつ社会にインパクトを与えようとする貢献の気持ちがある。それを放棄して外に行けというのか、と社長に問われたことがある。それに対して答えが見つかっていない。だからプロボノは会社外で行った方が良いということ、私は会社の立場ではまだ言えない。その根本的なところの答えがまだ得られていない。

戸成氏：会社の中でやれば間瀬さんの言われる通り。実際事業となれば自分の作ったものが社会にどう貢献しているのかが見えて、それを動機付けることがマネージャー最大のマネジメント。社員は自分のやっていることがパーツでしか見えないとモチベーションが上がらない。それが最終的に社会にどうつながっているのを見せてモチベーションを上げるのが、マネージャーのスキル。最近はそのスキルが低いところもあり、組織が大きくなるとどうしても隠れみものになり全体での貢献が見にくい。プロボノは裁量範囲が広いと達成感がある。もう一つ、ブラザー工業(株)の社長さまに理解して頂きたいのは、社内にいると会社が持っているノウハウ、知的財産が、どの社会課題に役立つか、イメージーションが広がらない。住友理工(株)だと、技術は自動車の中で使うことしか考えていない。ところが介護の世界で使える技術があるということ、外部の九州大学の先生に言われて始めて

気が付いた。うちの社員がプロボノとして介護団体、NPO に支援に行ったとしたら、「こんなことで困っているの？うちの技術を使えばこんな簡単」というパイプを繋ぐ。それがプロボノ。そしてそれは社内には絶対育たない。これが、社会の門を開くこと。

間瀬氏：サスビズの課題に応えるために、企業のプロボノが良いという議論で進んでいる。例えばこの東海地域で、戸成さんが言うような視野がせまく自社技術を応用できない人が何人かおり、その人数を供給してサスビズ側の課題をまかなえるならそれで良い。でもそれではまかなえない。ブラザー工業(株)の社員は 5,000 人。実際に企業の中で製品・商品開発できる人間は 100 名弱。その内 10%が外に出て行ったとして、サスビズ側のプロボノに対するニーズは満たされるのか。僕は満たされないとと思う。5,000 人の内、1,000 人が、それぞれ自分の社会的インパクトを達成できるやり方で参加するルートを作り、1,000 人が参加する方がサスビズ側のニーズには合うのではないか。そのためサスビズ側のニーズに合わせる企業側のプロボノのありようは、少し違うと思う。会社が人材育成とする支援でまかなえるやり方では合わない。それだと普通のボランティア推進で良いのではと思う。会社の新しい視点で、経営にインパクトが与えられるビジネスモデルで、会社からのプロボノはサスビズ側のニーズに本当に答えられるのか、という問いかけ。

戸成氏：NPO 法人メタセコイアの森の仲間たちで、コンサルティングが事業を整理したと。NPO 法人中部プロボノセンターであれば調査分析の前段となる。プロボノは調査分析して団体にとって支援すると一番効果がある支援策を選ぶ。さっきの癌のところだとサプライチェーンであるかつらの調達不安定であると気が付いた。それで今の仕入れ先を、新しい仕入れ先に変えないとこの道は拡大できないという結論に達しそこを担った。中国のメーカーを全部あたり、絞り込み中国まで行き業者をコンペした。原価計算も試作品のプロセスも仕様書も全部、5 人のプロボノメンバーで出来てしまう。そこまでやって NPO に取引先を渡した。そこまでやらないとプロボノじゃないと僕は思っている。そうするとさっきの消化不良になった話の理由は、問題の整理までだったから。そこから絞り成果を渡してあげないと参加メンバーも達成感が得られない。

興膳氏：三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング(株)も全然やれなかったということは言ってくれていた。時期も悪く、色々手探りだったと。それはそれとして、僕が少し不思議に思うのはそのそこまでやってあげたら儲かる気がする。いっそ企業が NPO を買収した方が良いのではないか。

戸成氏：この事業で言うと、NPO は営業に関するネットワークリソースをいっぱい持っていた。活用のアドバイスをしたら、この半年で契約するサロンが 10 倍になった。それはその NPO が真剣にやっているから。

興膳氏：その後の企業のプロボノチームと NPO の関係性っていうのはいつまで経ってもプロボノなのか。

戸成氏：プロボノは自分の時間外を使い良い経験をして帰ってくる。そこでいったんはお終りです。

興膳氏：嵯峨さんの話であった会社を辞めてこっちの事業を手伝うというのは出てきそうな気がするが。

戸成氏：あるかもしれないが、愛知県の企業でメーカーにいて、これだけの給料をもらって暮らすとなったら辞めないのでは(笑い)。

興膳氏：一方、NPO 側から言うと、そのメンバーの中ですごく良い人がいたら引き抜きたい。

戸成氏：但し、本人が年収 1/3 になっても行くと決めて行く。1/3 には彼らは乗らないと思いますが・・・。

興膳氏：なぜ聞いたかと言うと、なんとなく NPO の中でも、明らかに事業化できる案件、社会課題と、運動のような案件と別れると思う。僕はどっちは企業に収めた方がいいのではないかと考えている。

戸成氏：運動だと思っていたものを事業化しようと今第 2 チームが動いています。外国人の子どもたちに日本語を教える機材を開発した NPO がある。これを外国人の子どもたちに寄付している。しかしユーザーはお金がなく事業としては成立してない。それは受益者がお金を持っていないから。団体の理事長もそれはよくわかっていた。それでプロボノとして入った。分かったことが一つある。海外に子どもを連れて赴任している人にとって、自分の子ど

もが英語も日本語も喋れる、だけど英語も日本語も読み書きできないということが起きている。喋れることと読み書きできることは違う。そしてそのことについてこの教材が使える。また海外駐在者はお金を持っている。そこでその家庭に購入していただき利益を出し外国籍の子どもたちに寄付する、というビジネスモデルを今作っている。但し右手で稼いで左手で寄付するため大儲けするつもりはないがそういう発想は NPO からは出てこない。

村田氏：ここまでまとめると、二つのタイプと一つのアプローチがあるという話。プロボノとして必要なスキルを提示しハードルは高いが達成感はあるタイプ。ハードルを下げてやりたい人に来てもらいプロボノを増やすタイプ。そもそもプロボノは本当に効果があるのか。むしろ社員ボランティアの活動の方がサスビズには良いのではというアプローチ。

間瀬氏：そうした時に問題なのは、サスビズ側でどういう人が何人いれば、この地域はどこまで上がるのかというのが見えていない。だから僕も、評価委員として言ったのは、プロボノは欲しいがどう資源が顕在化されれば、どこまで解決できるのかという仮説がない。それがなければどのやり方でやるのが一番良いのかも見えないということ。

村田氏：それは来年度に是非実施するところだと思う。それが見えることによって、会社としての社会的インパクトを会社によっては見出してくれるかもしれない。

間瀬氏：類形を作った方が良い。しっかりと入り、社会的インパクトが出るパターンと、地縁組織のようなマネジメントが上手くいっていない組織、だけど地域にとってはすごくインパクトがあるところでのアプローチの仕方がどうなのかというようなさまざまな類形。そしてそれぞれのニーズの規模。そうなった時に、どこにお金を投下するのが社会にとって一番最適なのかという議論しないと、いつまでたっても同じ事案が2年、3年出てくるような場になる。

村田氏：という議論になって来ているが、これまでの議論を踏まえ、本当は全員に話してもらいたかったが、プロボノを会社で検討する予定の(株)デンソー神戸さんと中小企業の立場で参加頂いた(株)MARUWA の鳥原さん、今までの議論を聞いてコメントを、そして最後嵯峨さんからコメントをお願いしたい。

鳥原氏：今の議論を聞いて、正直我々にとっては別の世界の話。さっきもある社長と話していたが、それは大手にやってもらうこと。我々もCSRはやっている。社員も色々な所にボランティアに出かけているが、我々のやるボランティアは身の丈に合ったボランティアが精いっぱい。お客さんがブースを出しているから、そのお手伝いに社員が出かけたり、地域のお祭りの整備に出かけたり。30人の社員の内、正社員は20人もおらず、1年に1回くらいはボランティアに行くように言っている。ユニバーサルなこともしており折り紙もやっている。大手は大手なりの崇高な思いでやってもらいたい。中小はその姿を見てできることを手伝う。スケールメリットがあるところが引引っ張ってほしい。その中で一つだけお願いがあり、商売や声掛けの際に、そのように頑張っている中小企業に声をかけてほしい。商売でボランティアをやっている訳ではないが、それでも社員に無理言って手伝わってもらっている。そんな頑張っている社員がいる中小企業に、目を向けてもらいたいと思って聞いていた。正直、プロボノはそんなにすごいんだという感想。中々そこまで身の丈が到達できないので、やれることを粛々とやる。今日は良い勉強をさせて頂いた。これは皮肉でなく、こういう企業がもっと出てくると良いというのが率直な意見。

神戸氏：大変勉強になった。私の問題意識は戸成氏の問題意識(住友理工のプロボノ導入理由)に近い。我々の会社も規模が大きくなり、技術・技能を持っている社員でも、それを本業以外で社会にどのように役立てられるのかという所まで中々目を向けきれていない。プロボノは、社員一人ひとりが社会課題解決に貢献しながら、新しい事業機会を発掘していくことにつながるスキームになりうると思って聞いていた。今後、他社への聞き込みを進め、前向きに導入を検討したい。

嵯峨氏：最後に、一つ提案がある。既にプロボノサービスを提供しているところがあるため、まずは中部エリアにあるサービス提供者、支援団体数、募集内容、募集のタイミング、応募方法などが一覧でき、EPO 中部に問い合わせ

せがきたら紹介できるような状態にする。まずはそこを目指してみるとよいのではないか。そうするとまた来年集まった時に、そのリストに加えられる団体が3つ、5つ増えたということも見て広がりを実感できるだろう。

③ダイアログ3 ESDを地域で実践するために…仕組みづくりと評価 会場：1105

[目的]

2014年11月にESDユネスコ世界会議が開催され、ESDに取り組む世界の人々が集結し、国連「ESDの10年」の成果を共有し、今後の展開について議論を交わした。ここ中部地域においても、多様なステークホルダーの、ESDの重要性に対する理解が進み、学校と地域の連携によるESD授業実践が進められている。この成果を踏まえ、ESDの取組を継続、また他地域に展開するために、ESDの評価とESD推進のための体制づくりが求められる。いかにESD実践を支える地域基盤を形成するか、について意見を交わす。

[プログラム]

●趣旨説明

ESDユネスコ世界会議の成果

環境省持続可能な地域づくりを担う人材育成事業の成果と課題

●各県の取組紹介

●成果の共有・課題の整理

●平成26年度「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」

愛知県「名古屋市立八熊小学校」発表会

●トークセッション

意見交換

論点①「ESD取組を継続し、広めるために必要な地域のしくみとは」

論点②「ESD取組を継続し、広めるための評価方法は」

●まとめ

[参加者]：20名（他スタッフ2名）

■出演者

【富山】宮原美充氏(富山市立中央小学校教諭)

【富山】本田恭子氏(環境教育ネットワークとやまエコひろば代表)

【石川】池端弘久氏(金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山ふれあいの里館長)

【福井】今井尚子氏(学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校附属中学校中学部主任)

【福井】土橋佳久氏(福井県安全環境部環境政策課環境計画推進グループ主任)

【長野】渡辺隆一氏(信州大学特任教授)

【岐阜】小林由紀子氏(NPO法人e-plus生涯学習研究所代表理事)

【愛知】大鹿聖公氏(愛知教育大学准教授/なごや環境大学実行委員)

【三重】寺田卓二氏(環境教育ネクスト・ステップ研究会代表)

【三重】寺本 豊氏(学校法人津田学園津田学園小学校校長)

【愛知】千頭 聡氏(日本福祉大学教授)

【愛知】川原田真弓氏(名古屋市環境局環境企画部 主幹(環境教育))

【愛知】戸苅辰弥氏(NPO法人藤前干潟を守る会藤前活動センタースタッフ)

〈ESD人材育成事業 愛知発表会〉

【愛知】服部易弘氏(名古屋市立八熊小学校教務主任)

【愛知】大村邦仁氏(名古屋市立八熊小学校努力点推進委員長)

【神奈川】萩谷衛厚氏(株式会社 TREE)

【神奈川】今井麻希子氏(株式会社 TREE)

■一般参加者

【愛知】松原弘道氏(尾張旭市立瑞鳳小学校校長)

高木丈子(環境省中部地方環境事務所)

■コーディネーター

【石川】鈴木克徳氏(金沢大学環境保全センター長・教授)

(スタッフ) 高橋美穂(環境省中部環境パートナーシップオフィス コーディネーター)

中島萌子(環境省中部環境パートナーシップオフィス インターン)

[内容]

■趣旨説明 鈴木克徳氏(金沢大学環境保全センター長・教授)

本ダイアログでは、環境省がこの2年間進めている「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業(以下、人材育成事業)」の授業実践についての報告を中心とし、議論を深めていく中で、いかにESD実践を支えるような地域基盤を形成するか、いかにESDを評価すると良いか、まで進めていきたい。ESDを考える際に、「地域と学校」はとても重要なキーワードであり、そういった観点から本事業を見ていく。本事業では、学校の具体的な単元計画を作成する。その単元計画作成の課程で、どのように地域とのつながりをつくり、深めていくのかについて議論を深めたい。

「ESDの評価」はとても重要であるが、何を評価するのがとても難しい。最終的には、子どもや個人にどのような能力をどのように育むかで評価されるべきであろう。或いは、学校がどこまでESDに取り組んでいるのかという評価の仕方もある。ESDユネスコ世界会議においてユネスコでは、世界全体で「ESDの10年」でどれくらい進んだのかを評価しようとした。「評価」と言っても何を評価するのか、誰が評価するのかよって幅がある。学校の先生が子どもたちを評価するだけでなく、自己評価、あるいは子ども同士の相互評価や地域による評価など、その主体も多様化しており、様々な面がある。評価方法についても議論したい。

限られた時間であるが、ESDは、一つの決まった答えのないことはいかに取り組むか、その力をいかに身に付けるかを重視しているので、今日も予め答えを設定した議論ではなく、みなさんの議論の中から何が得られるのかを考えていきたい。

ESDユネスコ世界会議の最大の成果は、「ESDの10年」というキャンペーンが終わった後においても、ESDを進めていく、ESDが重要である、ということを経世界的に合意したという点である。そして、今後のESDをどのように進めていくかを考える際のガイドラインになるグローバル・アクション・プログラム(以下、GAP)が発表され、昨年12月19日に国連総会で採択された。世界全体、国連がESDを進めていくことを意思決定したことを踏まえ、今後、我が国で、中部地域でどのようにESDを強化していくかを考えたい。また、環境省の人材育成事業の成果・課題から、本事業終了後いかに続けていくかについても議論したい。

■中部7県のESD実践と成果の報告

【富山県】本田 恭子氏(環境教育ネットワークとやまエコひろば 代表)

昨年は古沢小学校という呉羽丘陵の麓にある学校で、「里山」をテーマに授業を行った。地元で里山がありながらほとんど興味を持たない子どもが、体験や地域の人の話を通じて、里山に興味を持ち、自分たちも守らなくてはいけない

んだと言うように、子どもの変容が見られた。

今年には町中にある堀川小学校で、「町探検」をテーマに行った。富山市内でも山間部にある神通碧小学校が実施する同じテーマの授業と連携して映像教材を制作し、映像を活用しながら他校の子どもの学び・探究の歩みを子どもが自分と重ねあわせて、市電通りで見つけた自分の宝物について、地域の人に聞いたりしながら探究を深めた。若い先生が担当し、授業において映像を十分に活かしきれていたかという点で歯がゆい所があったが、映像と授業づくりとをいかに連携させていくのかの話合いやノウハウ、今後このようなモデルをどう活かしていくかが大事である。

将来の環境に配慮した人材を教育現場でいかに育成するかを考えると、一方的に教える教育ではなく、子どもの考えを引き出す学び合い、経験や実践を通して自分で考え、仲間と議論を深め、自分で行動できるような力を育む ESD の手法には期待が持てる。ただ、発達段階に応じて、自分の地域を見直し深めていく学習をどう展開するか、「社会性」という視点をいかに盛り込んでいくか、が大事である。

【石川県】池端 弘久氏(金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山ふれあいの里 館長)

昨年度は金沢市内にある泉中学校で実施した。一年生は総合的な学習の時間を一年間かけて、様々な分野についてクラスを解体したグループで追求した。その内の一つで校区の醤油屋やお酢屋の老舗にインタビューするなど「金沢の食」について体験的に学習するプログラムを実施した。子どもたちが家庭でアンケートをしたり、保護者と映像を一緒に視聴するなど、家庭をうまく巻き込んだ授業になったことや、家庭科の教科担任が最後の最後まで頑張り通し、「やってよかった」という言葉を発したこと、この2点が大きな成果であった。そして、それを支えた校長先生のサポートがESDを進めていくためには欠かせない要素であった。

今年と同じく金沢市の三馬小学校の5年生が、校区を流れる伏見川を、自分たちの暮らす中流域を含め、上流下流と探り、石川県 No.1 の川にしたいと8つの宣言を作成した。若手の担任の先生と授業の目標の立て方など何回も勉強会をした。学校現場においては、まだまだESDに関わる理論がはっきり示せていないと改めて思った。枠組みやキーワードはあるが、先生方がそれらを理論立てて学習している感じが弱い。学校で既に総合的な学習での目標立てができていくところに、ESDの付けたい力などをどう重ねていくのかといったところを少しサポートし、一緒に学びながら取り組んだ。若い先生が増えてきているので、今一度仕切り直し、ESDの根本理論について学習指導要領と合わせながらしっかりと打って出ることが必要である。また、担任の先生のおかげで、学校の持つ目標に、ESDの資質能力を重ねて授業を組み立てることで、授業内容や指導方法が改善出来たことは大きな成果であった。校長先生からは、今まで断片的、イベント的に実施してきた授業を、ストーリーとして大きな単元をつくることができ、大きな財産になったと感想をいただいた。このような形で地域に教育課程が根付いていく可能性は大きく膨らんだのではないかと思った。評価については、目標立てをもう少ししっかりとしないと、子どもの変容を見る評価基準も明確に出ないため、実践を整理する必要がある。石川県では、この10年、さらに総合的な学習が始まってから10年以上経過して、本当にいい教育課程や実践がたくさんできた。しかし、先生方にESDをやっているという自覚はあまりない。この状況をどのように考えていくのが大きな課題である。

【福井県】今井 尚子氏(学校法人嶺南学園敦賀気比高等学校附属中学校 中学部主任)

ESDに関して理論的に弱い教員がほとんどだったため、どのようにすれば授業が深まっていくかを担任が十分考えられなかったことが反省点である。事業を通して、こうやってやればいいと思うことが多く、特に、本校では中高一貫詰め込み教育のようなことをしているので、全く違う視点、発想でESDに取り組んでいく必要性を感じた。

評価については、「生徒がどれだけ本気になったか」というか、「自分の問題として取り組んだか」というかを評価することが必要であり、そういう授業ができないとダメだと思う。

【長野県】渡辺 隆一氏(信州大学 特任教授)

昨年度実施した松本市立源池小学校では、総合の時間を使って本事業を展開した。特徴的だったのが、1年生から6年生までが揃って発表を行うというスタイルだ。学年連携により学び合う仕組みができていたため、1年生は上級生の発表を見て学ぶことで、自分が5、6年生になった時に教員の指導がなくても発表をすることができる。この学校のスタイル、システムにESDがうまく定着するとよい。教員の異動によって、ノウハウが学校に根付かないという課題をよく聞かすが、源池小学校のようなスタイルになっていると継続する可能性がある。

本年度の松本市立会田中学校では、山と地域の森・林を見比べるという、行事として実施している学校登山とESDを組み合わせて、NPOなど外部支援者も入り、地域を巻き込んだ授業づくりと実践を行った。その過程で気づいたことは、NPOなど地域が望む学習と学校が望む学習、期待する学習効果が違い、その調整が難しいということである。しかし、生徒が山に登るだけで終わっていた単発の学校登山が、今年は、地域の森と見比べ、地域資源の価値について触れることができた。先生は授業づくりに苦労されたが、やって良かったと言った。中学校では様々な授業をバラバラにやっていたが、ESD的な流れでまとめることができた。ESD的な考え方を導入した授業を実施したことで、生徒が地域の課題を発展させ、普段あまり意見を出さない生徒が地域の森や山について積極的に意見を述べるようになった。先生方は喜んでいて。

この事業を通して、いろいろなセクターが参加するということではなく、どのように調整して授業に取り込んでいくかという全く新しい教育のスタイルを考えないと成功しないと感じた。中学生はESDの視点で社会や地域をきちんと捉え、考えることができる。だからこそ、中学校でESDの取組をしっかりと出来ると良いと感じた。

鈴木氏：学校目標の中にESDを位置づけること、あるいは地域と繋がることによる持続性が非常に大きい。校長先生が、どこまで頑張ってくれるかという期待感が非常に大きいという話であった。

【岐阜県】小林 由紀子氏(NPO法人 e-plus 生涯学習研究所 代表理事)

ESDを根本に据えて、もう一度「自分達の環境教育を見直そう」というコンセプトで行った。

今年の羽島市立正木小学校では、これまで実施してきた環境教育のプログラムを活かしながら、ワーキンググループで話し合いを進めた。先生との打合せでは何を中心にしたらいいか悩んだが、省エネを軸に食、フードマイレージや地産地消・旬産旬消、自然環境教育なども含め、一つひとつまとめをしながら全体がESDにつながるプログラムとなった。来週の発表会では5年生から4年生につなぐという方法で、PTAの参観日を使い4、5年生の保護者に対して自分たちの取組の成果発表をする。最後の発表までをひとまとめに、ESDというよりも、自分たちの暮らしをどうしていくのかを子どもたちが一人一つずつ宣言する。

評価の面では、自分たちが良かったと思え、継続しているのがESDと考え、取り組んでいる。先生方の興味により、修正を加えながらプログラムづくりをしてきたが、今回のようにESDを根本に据えた全体プログラムはなかったため、先生方と十分に話し合えたことが良かった。

【三重県】寺本 豊氏(学校法人津田学園津田学園小学校 校長)

今年度、人材育成事業を実施した。実際のところ、ESDの授業がどのようなものかまるで分からなかった。6、7年前から毎年4年生が本校の前を流れる嘉例川の環境調査を続けてきたが、水質調査や生き物の調査を行ってきたものの保護者に発表して終わりというような形であった。8月下旬からワーキンググループで授業づくりについての話し合いを随分し、担当した1年目の教員がいろいろなお指摘をいただいた。その結果、本当にその教員は育った。さらに、今まで

続けてきた嘉例川の環境調査を ESD の視点から見直すことができたことが本当に良かった。その授業づくりのワーキンググループに、担当教員の同僚も参加していて、その同僚が自分の授業のビデオ教材づくりを始めた。本事業の映像教材に触発されたのだと思うが、それを使った授業をしてくれるようになり、非常に良かった。本事業で教員を育てていかないといけないと感じた。学校という組織の中で教員をいかに育てていくかが一番重要なことである。そのためには、校長がためらわないことが大切である。ためらってはいろいろなことができない。そして、いろいろな人にお世話になる。本校の教員は初めは来ていただくのを嫌がっていた。いろいろな方に来ていただいて自分の視野が広がっていくこと、子どもの考える範囲が広がっていくことを知って、いろいろな人を呼んでほしいという教員も出てきた。そのように、いろいろな人にお世話になることを続けていかなくてはならない。最後に、続けていくことが大切。本校の環境調査も 4 年生がずっと同じ川で、同じようなやり方で、毎年毎年、部分を変えながら続けてきた。その続けてきたものが本事業の参加のきっかけになった。今後も学校で教員と共に頑張っていきたい。

■ 成果の共有・課題の整理

池端氏：中高一貫詰め込み型の授業の中に ESD を取り入れることは難しい。しかし、授業を革新していくに当たり ESD の果たす役割が大きいと言われている。学校は次につながる学習が触発される場であって、児童の放課後学習がとても豊かになる経験となる学校での授業実践ができると良い。現職の時に、必要な授業の核心は復習も大切だが予習ではないかと提案したことがある。これからの授業は、調べてきたことを基に、皆で話し合い、情報を得て、さらに考え続ける。そのためには予習をしてこない授業にならないという話をした。しかし、「基礎学力のためには復習が出来ないとだめだ」という意見があり、最終的には実現できなかった。

文科省も ESD は授業を革新する大きなエンジンだと言う。しかし、ESD だけではないだろう。各学校では今、授業に必要な革新とは何かを明らかにしようとしている。そのためにも ESD で学校全体を見直していく作業をしている。そういう道筋かと思う。何か一つの一般解があるわけではなく、学校ごとに特殊解があり、ESD はそのことを進めるための、大きな意識改革の下支えをするのではないかという気がする。

ESD は量的には拡大し、質の向上もしているが、まだ教科教育に対する子ども達の「やりがい」のレベルには到達していない。学力調査結果を見ても、総合的な学習は経年では伸びてきてはいるが、算数や国語に比べると教科には達していない。やっている体験は大事だが、学習内容や知識の部分できちんとしたものが足りないのもう少し教科に近づく必要があると分析している。ESD の質的な向上はこれから大いに求められてくる。

もう一つは、点としての実践モデルはたくさん出てきているが、広がっていない感じが大きい。これがどうしたらつながっていくのかを考えていくことが必要である。

先生や校長先生が異動すると途端になくなる、という話は少しずつ変わってきたと感じる。例えば 10 年以上川をテーマに実施してきている学校もあり、様々な形で地域に根差した実践は膨らんできている。しかし、これからのことを考えると、学校の授業を支える地域という構図だけではなく、地域が主体となり SD を進めていくというバックボーンがないといけない。学校は地域から支えられる存在から対等に地域の SD を進めるための拠点になることが求められている。この点からも、地域における、特に既存の公民館などを対象に ESD の浸透を図っていく時期にきているのではないかと考える。

もう一つが、野外教育施設の全国調査で、先生方が野外活動に出て何を不安に思っているかという統計がある。当然、上位は「子どもの事故」や「病気」だが、次に「自分の指導力」があがっている。「大学時代にどんな体験的な活動をしているか」というデータでは、体験がものすごく乏しい状況である。そのため、ESD は座学だけでなく、より自然や社会のフィールド調査をしたり、自然観察をしたりする等の体験的な学びが重視されることから、体験的な学びを教員養成の中でもしていく必要がある。

また、人材育成事業の大きな成果の一つは、ESD を実践した若い先生の輝く顔が見られたことである。「やってよかつ

た」と自分の成長を実感しているのです。こういった場にも若い先生方がどんどん入ってきて、熱い志を作れるようにしていくことが課題になってきている。若い先生の輝く姿は、次に続く若い先生の灯台になるので、若い先生方のネットワークづくりに少しずつ力を入れていく必要がある。

先ほど、総合的な学習を地域の問題をテーマに実施して深みが出た、というようなお話があったが、子どもたちは、自然や社会に関わっていった時にどうやってリアリティを持つのか、そのリアリティを持って住民の一人としてどうやって手助けすることができるのか、行動が出来るのか、そこが非常に重要になっていく。ESD の授業かどうかの見分けをするときに、そういった部分が非常に重要である。

評価は授業の革新、先生の成長や学校の変革と重なっているのです。ESD をいかに評価するかという点を真剣に考えていく時期に差し掛かってきている。

【福井】土橋 佳久氏(福井県安全環境部環境政策課 環境計画推進グループ主任)

今の部署に配属されるまで、20 数年間小学校教員として学校現場にいたので、その経験を中心に話す。

まず成果について、ESD に取り組んだ学校はすごく成果をあげ、教員も育っていると思われ、人材育成という点ではすごくいい成果を上げている。課題は ESD の理論が先生方に伝わっていない、ESD を実践しているという自覚がない、などがある。現場にいた時代に、ESD が今までの取組と何が違うのかという疑問を常に持っていた。文科省の指導要領に生きる力を育もうというような話が出てから、子ども達に課題解決的な学習方法を当たり前のように指導してきた部分がある。そこに改めて「ESD 的要素を取り入れて」と言われても「今までの指導法とどう違うの?」という疑問を持ったことは否定できない。これから ESD を持続させるためには、モデルとしてやるにしても、学校の先生の負担が大きいことを十分に勘案して、地域の力をつけていく必要がある。地域コミュニティというのか、ESD を進めるプロジェクトチームを立ち上げていくことによって、地域が学校に積極的に入っていけるような仕組み、つまり学校側が地域の人をお願いしてどうののではなく、地域が受け皿のようなものをきちんと作っていけるような仕組みが出来ていくと良い。

ESD が広がっていかないという問題の解決には、環境部はもちろん、教育委員会部局、あるいは地域の人が見に来て、「子どもたちはこんなことを考えて行動しようとしている」と知ってもらうことがとても大事である。

【三重】寺田 卓二氏(環境教育ネクスト・ステップ研究会 代表)

ESD という言葉の問題は大きい。環境教育か ESD かということがずっとあり、かつて自分も高校で取り組んでいた時に、どこへ向かっているのか分からず疲弊してしまった。「持続可能な社会を作るために取り組んでいる」と、その言葉が見えた時にストンと落ちた。自分たちのやっていることが何に向かっているのかが先生の心に落ちることが必要であるだろう。これから ESD を広めるには、校長先生の決断が非常に大きい。今、四日市市で働きかけているが、学校現場が忙しなかなか入り込めない。そこで、「教科の中にいっぱい散らばっていることを上手くつなぐと ESD になる。新たにやってもらうことは必要なく、一粒で二つ美味しいことを考えましょう。」とお話して ESD カレンダーを勧めている。校長先生、教員に納得していただけることも大事であるが、最終的には文科省の支えが必要だろう。三重県で見ると、学力調査結果が非常に低いため、そのことばかり言われている状況で、かつてフィールドにもっと出られた教員がなかなか出られなくなっている。良いことは分かるが、取り組めない状況になっている。

■意見交換

【愛知】大鹿 聖公氏(愛知教育大学准教授/なごや環境大学実行委員)

学校の中で ESD を進めていくうえで、先生自身が「一人の市民として普段の生活の中で地域を支えている、未来のために自分は活動している」、「ESD は教科をまたがって、全部つながっている」と生活の中で実感を持てなければ、いくら文科省が言って学校の中でやろうとしても自分の中に落ちないと辛い。つまり、この問題は学校現場だけの話ではなく、教員を育てるプロセスを変える必要性に行きつく。いかに教師を育てるか、教師が市民としてどう生活できるかということもどこかで議論していく必要がある。

鈴木氏：一番重要なポイントは、地域と学校の関わり合いが何か、学校と地域の関係をどう位置づけると良いのかであり、そのために教員にどういった訓練をしていくか、である。

東北大震災の際に、学校は地域において非常に重要な施設であることが明確になり、学校と地域の在り方をもう一度見直してみる必要がある、という問題提起がなされた。他方、日本の教育は法律に基づいている。学習指導要領に書かれていることを教えなくてはいけない中で、地域の言うことだけを聞くわけにはいかない。地域と学校がどのように相互に関わっていくかを一緒に考えながらやっていくプロセス、どのような形でつながっていくか、そのやり方を考えることも必要である。

先生がどう教えていいかわからないような状態だと困る。一方、ESD という科目を立てなさいという議論もあるが、教科の中にいかに ESD 的思考方を組み込んでいくのが出来ないといけない。教育学部では履修しなくてはならない単位数が多いので、新しい科目を増やすことは教授会には通らないという実態がある。教科教育の中でいかに ESD 的なものの考え方に取り組んでいくかが重要である。

【愛知】千頭 聡氏(日本福祉大学 教授)

ここには教員の関係者が多いが、実はそれでは詰まってきてしまう。隣の 2 つのダイアログが見えてくると、学校は元気が出てくるというか、SD が出来れば E はそこに向かうために、SD に取り組む人が人材になり、教員もそこに向かうことができる。そのような地域が増えてくれば学校が変わってきて、学校が人材を提供できる担い手になってくる気がする。

渡辺氏：学校だけに任せるのではなく、学校とは別に ESD や環境教育が出来るセクションを立ち上げる必要がある。地域に根付かせるためには子どもから大人まで地域の中で活動できる場を持つことが必要である。環境教育 40 年、ESD10 年を実施してもあまり定着しないのはそのセクターが育っていないからである。コミュニティスクールは NPO や地域などと連携して ESD を取り入れることで、学校も NPO も両者が広がる可能性がある。

■平成 26 年度「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」愛知県発表会

報告者 大村邦仁氏(名古屋市立八熊小学校 努力点推進委員長)

服部易弘氏(名古屋市立八熊小学校 教務主任)

本事業で実施した「季節と堀川の生物」、堀川を柱とした環境学習について報告する。

八熊小学校の学区を流れている堀川は庄内川から取水する形で始まり、名古屋港に注いでいる。堀川の水深は 1~3m 程度で、川の流れも満潮時は逆流するので、川というより運河である。決してきれいな川とは言えない。流域で、通称が異なっているのも特徴で、河口から「堀川」、「黒川」、「庄内用水」と呼ばれている。



本校は全学年を通じて、「堀川」について学習している。3 年生の黒川の活動で、堀川 1000 人調査隊と連携したり、5 年生のヨウサイの成長を調べる活動で、恵那農業高校と連携してきた。そして、4 年生と 6 年生では、藤前干潟を守る会と連携し、特に 4 年生は一年を通して連携し、昨年度は藤前干潟に 4 回、今年度は 3 回出掛けている。おそらく名古屋市で一番多く、藤前干潟に出掛けている学校ではないだろうか。

実証授業は 4 年 2 組で行った。4 年生では、理科で生物と季節の関係を学習する。そこで、児童にとって身近な藤前干潟と堀川を題材にした。堀川に生息しているカニを中心にして、生物が季節に適応してどう生息するかを考えさせることで、身近な環境を大切にしようとする態度を育てていくことを目標に実践に取り組んだ。

実践に向けて、ワーキンググループでどのようにしたら効果的な映像になるのだろうか、どのタイミングでフィールドワークに行くかよいのかなどについて打合せを行い、様々な立場の方と多くの意見を交わし検討を重ねた。

実証授業では、まず、藤前干潟の映像を見て、藤前干潟での体験を振り返り、生物にはすみかが必要であることを考えた。さらに、堀川の映像を見せ、季節が変わると生物にはどんな変化があるか疑問をもたせた。

昨年度、1 週間で何匹のカニが捕れるのかを調査したグラフと、気温・水温を測定したデータを基に、季節と生物の関係を考え、予想を立てることとした。水温が 18℃であった 4 月にカニは捕れなかった。しかし、水温が 25℃になった 5 月には 4 匹のカニが捕れた。6 月になると水温は 28℃になり、カニは 8 匹捕れた。水温が 31℃になった 7 月にはカニは捕れなくなり、水温が 30℃あった 9 月にもカニは捕れなかった。水温が 24℃になった 10 月には、2 匹のカニが捕れた。

そこで、「11 月の秋の堀川はどんな様子だろうか」を問題として、児童に予想をさせてから堀川の観察に出掛けた。予想はカニがいる、いない、と半分に分かれた。観察の結果、仕掛けにはカニは入っていなかった。

学校に戻り、カニが捕れなかった理由を考えた。児童は、水温が高すぎても低すぎてもだめ、生物には適温があることに気付く以外にも、工事で護岸の傾きが急になったり、隠れる場所がなくなったりして、すみかがなくなったからなど、その環境からも考えることができた。

実証授業後に、1 年間活動をしている、堀川クラブでこんなことが起こった。以前、堀川の仕掛けで調査したある児童から仕掛けを見に行きたいと希望を受け、もうこの時期の堀川にはカニはいないだろうと内心では思いながら、児童の思いを大切にされたので、仕掛けを見に行った。すると、なんと 5 匹のモクズガニが仕掛けに入っていた。おそらく産卵のため、海に下りるカニが捕れたのだろう。児童も私も、生きたモクズガニを捕ったことは初めてだったので、とても興奮した。堀川には、水温や環境では分からないことがあることを児童と改めて実感した。

実践を通し、児童は堀川について様々な思いを持った。もっときれいな川に、もっと生物がたくさんいる川に…、中にはカニを食べることができるような川にしたいというものもあった。実現が困難なものもあるかもしれないが、八熊小学校は、こ

れからも「身近な堀川から未来へつながる」よう実践を継続していきたい。

●ARについて 株式会社 TREE 萩谷衛厚 今井麻希子

愛知県の事業では、AR（拡張現実）、端末をかざすことで端末から映像が見られる技術を取り入れ、撮影した藤前干潟の映像を教材化した。AR を実際に見るにはアプリケーションをダウンロードし、その端末をかざす必要がある。藤前干潟を紹介する冊子の表紙にARが仕掛けてあり、そこに端末を流すと映像が流れる仕組みである。AR は、新たに印刷物を作る必要は一切ない。既存の教科書、ポスターなどに後付けで映像をひもづけることができる。学校現場でご活用いただきたい。



●愛知県ワーキンググループメンバーよりコメント

【愛知県】川原田真弓氏(名古屋市環境局環境企画部 主幹(環境教育))

八熊小学校のワーキンググループに参加した。発表の最後の「堀川をきれいにしようと思いました」という児童の感想を聞き、市としては子どもたちの思いをどう次につなげていくと良いかを考えていきたい。堀川をきれいにしたいと言った子どもが学校で学んだことを住民の一人として行動していけるよう、その子どもの思いをどうやって地域で支えていったらいいのか、そういったことが出来るような社会にしたい。堀川をきれいにしたいという思いに対して、様々なNPOや地域の団体、活動の機会やフィールドの紹介、あるいはコーディネートの仕組みなど、参加、行動できる仕組みづくり、ESD の見える化につなげていけると良いと考えている。

鈴木氏：ユネスコスクールの実態調査を行った際に、一番重要だと言われた力はコミュニケーション能力である。地域の人々とのコミュニケーションや、発表の機会を通じて、地域の人々に児童の学びを受け止めていただくことはESDにとってすごく重要なファクターになっている。また、児童の想いを次につなげていくために、地域が何をできるのかを考えることも大変重要であろう。

■トークセッション「ESD の評価、ESD 実践を支える地域の仕組み」

大鹿氏： 教員を送り出している大学から現状を話したい。今の若い先生はいろいろな意味で能力や経験が不足している。その一番の理由は教員免許を取るためのカリキュラムが固定されていて、どうにもこうにも増やせない。必要最小限しか取れない状況でしか現場に送りだせていない。そこを改善するためには、大学の中でそれぞれの大学教員がどれだけ対応できるかという話と、あとは現場に出てからの研修でお願いしたい、というのが大学の実情である。現場に出ると、実際には研修に出る時間がないので、先生方の学ぶ時間がないという学校の現状もある。

ESD なり環境教育が学校の中で広まらない理由は、大学や教育現場の中で、学習指導要領を含め ESD や環境という立場が曖昧になっていること、である。各教科であれば教育法という講義があり半年間学ぶが、環境は教えずにはいけないものではなく、大学に任されている。いくつかの大学できちんと教えている所はあるが、必修ではない。制度が整わない限り、学校の先生にとっては +α でしかなく、そこが難しい。その中で広めるためには、中身ではなく、能力とつなげることである。環境学習を受けた子どもたちにどんな力が身に付いて、どんな能力が身に付いたかを見える形にすると良い。環境や ESD は理科や社会の先生がやれば良いという感覚で、英語の先生や数学の先生がやれるかという、やれない。そういう先生を巻き込むためには、内容ではなく能力や考え方という話になる。今はかなり、表現活動やプレゼンテーションなど、言語活動が流行なので、それを取り込めると、どの教科でも実施してもらえることが分かっている。そういう方向で上手く様々な地域の問題を考えながら実践する、文章にしてみるなど表現することで、学校の先生に取り組んでいただけた。内容ではなく能力を重視すると ESD になる。

もう一つは、テーマは地域に根差していないといけな。今の子どもも、先生もそうだが地域のことを全然知らない。教科書に載っている表面的な全国的な話ではなく、地域独特のことを知ること、そのことを通して力を身に付けるというカリキュラムを実施していくと上手くいくのではないか。関心や興味が全くない人でもできるようなシステムにするには、そういったことが大事だと思い、5 ミリでも前進するような活動に取り組んでいる。

【富山県】宮原 美充氏（富山市立中央小学校 教諭）

富山市立中央小学校に来て 5 年目になる。中央小学校は歴代の先輩たちがしっかりと体制を整えてくださったおかげで研究体制はかなり整っている。評価については、毎回難しいと思っているが、発表や最後のまとめる部分が子どもの実感のある評価であると考えている。自己評価もでき、他者評価もできるのではないかな。何より、子どもたちが自分の考え方が変わったと思える場が発表の場でもあったりする。発表する場が大事であると思う。

地域との連携についても、困っているところであるが、先生よりも子どもが直接地域の方に働きかける方が動いてくれることが多く、今まで何回も子どもに助けられた。また、教員自身も普段から ESD をしているか、という話があった。子どもたちがペットボトルキャップを集めている。国際理解の教育をした時に、子どもたちは家や、近所を回りいっぱいペットボトルキャップを持ってきた。そうすると、教員である自分がそのような姿を見て動かされ、自分もやらなくてはいけないと子どもに学んだ。コンビニなどで分別する場所があるが、分別せずにそのまま入れようかと思う時もある。が、ちょっと待てよと思い踏みとどまるようになった。子どもの働きかけが地域に広がったり、教員を動かしたりする。学校から発信していくことが大事だと考えている。

千頭氏： 環境教育と ESD という言葉、両方出てきているが、ニュアンスが少し違うと思う。ESD という言葉で語るとまさに SD という、世界をどんな社会にしたいのかというメッセージを子どもたちに伝えなければ、教科書の世界だけではどうしようもない。大人同士にももっと必要な議論である。子ども達が ESD を学んだ時に、「どんな大人が ESD をきちんと身に付けている大人か」あるいは「どんな社会が、みんな ESD という言葉を意識している社会か」が見せられないといけな。

そこを考える必要がある。

中津川の加子母と付き合いがあり、夜の 8 時くらいから教育懇談会という、地域の人と学校の先生全員が校長命令ではなく集まり、延々と子ども達全員のことを実名をあげて話し合っている。彼らは ESD という言葉を使わないが、まさに ESD そのものである。そこへ赴任してきた先生は「大変な所へ来た」と思っているだろうが、巻き込まれてしまう。そして、その先生も子どものことを延々と議論できるようになる。地域社会が変わらないと学校の現場だけで ESD について議論していても辛い。答えがないことであるが、隣の部屋のダイアログを含め、地域社会をどう SD に変えていけるかという議論を行きつ戻りつしないといけないと実感している。

【愛知県】戸苅辰弥氏(NPO 法人藤前干潟を守る会藤前活動センター スタッフ)

藤前干潟を守る会は、地域というよりはフィールドに密着している NPO である。先ほどの話に戻るが、学校の先生方が忙しい中で、ESD あるいは野外教育活動や環境教育活動を実践していく。その中で、フィールドへのコンタクトの方法やコネクトがないという話があった。私が子どもの頃は、子どもたちをフィールドに連れて行って何か活動することや、実際にフィールドに密着して活動している市民グループや NPO はあまりなかった。その状況から比べると、藤前干潟を守る会も含め、愛知県、岐阜県などのフィールドに密着した市民グループや NPO がかなり増えてきている。学校の先生とフィールドや地域に密着している NPO や市民団体をどうやって結びつけていくのが重要な鍵になる。藤前干潟を年がら年中見ているので、他の人に比べればはるかに藤前干潟について知っているつもりである。その場所、フィールドなり地域なりに密着しているグループと学校を結びつけるコーディネーターの役割がこれから重要になってくる。それを担うのは行政、あるいは NPO になるのか、いろいろなやり方はあるだろうが、いずれにせよコーディネートは重要である。

■総括 鈴木克徳氏

目的の一つである「地域と学校」については様々な議論がなされた。地域と学校が双方向に関わり合っていくかをどのように実現していくかがとても重要である。そのためには「子どもが変わること」が重要であり、子どもが変わるためには先生が「考える方向を示唆すること」が重要である。先生が変わるためには「大学で教える教員が変わること」も必要であるだろう。そういった一連の流れに加え、地域と学校を結ぶためには「コーディネーターのような存在」も必要である。あるいは「対話のプラットフォーム」という、みんなが出会い、経験を交流するような場があると良い。いくつかのやり方があるが、学校の先生にやりなさいと言っても現状では難しい。どのような工夫が出来るのかをそれぞれの地域で考える必要がある。



他方、ESD の評価については十分には議論が深まらなかった。ESD の評価については学者世界でも様々な議論をしているが、評価の対象が何か、に始まり、子どもの変容や、実施している授業や ESD の推進面での学校に対する評価など様々である。学校評価は全ての学校でしているが、その中に ESD の視点がどのように入っているのか、あるいは日本の国家政策の中に、学習指導要領の中にどれだけ組み込まれているのかといった評価もある。学習指導要領の中に ESD が組み込まれるということに対しては、肯定、否定論の両方がある。肯定論としては、日本の教育体系は学習指導要領に基づいて教えることが法律で決まっているため、学習指導要領にしっかり書き込まれることが重要であるとの意見がある。他方で、学習指導要領に書き込まれると、学習指導要領に縛られすぎるのではないかと、という意見もある。ESD が ESD として、子どもたちの「ものを考える力」を育てていく形にならず、「書いてあるからこのようにやりなさい」となってしまうと、本末転倒かもしれないという意見がある。

現在学習指導要領の改訂作業が進められているが、基本的には ESD を今まで以上にしっかり学習指導要領に組み込む方向で考え、動いている。文部科学省の中でも、今まで国際分野を担当する国際統括官が ESD 推進の中心

であったが、初等中等教育局も本格的に取り組むと宣言している。昨年 12 月には文部科学省から改めて都道府県知事、都道府県教育委員会などに対し、積極的に ESD を支援して下さいという通知が出ている。

ユネスコは、この 10 年の終了時に、10 年間のキャンペーンの全体の評価をしようと言った。2009 年の段階ではどのような内容が ESD として取り組まれているか、どういう構造、どういう仕組みでされているのかを中心に評価した。そして 2014 年段階では「アウトカム」を中心に考えた。

今、次のステップに必要な ESD の推進に関する世界全体の考え方は、今後の 10 年の成果としてどういうインパクトを出していくかを中心に、時代によって、世界全体としての ESD の評価の視点が変わってくるだろうと言われている。評価に関してはたくさんのファクターがあるため、教員による評価だけではなく、子どもたちの自己評価がとても大事である。子ども同士の相互評価、あるいは親や地域の人たちからの評価など様々な評価があり、だんだんと広がる傾向にある。1 学期単位や 1 学年という単位から、長い時間をかけて、学校を卒業するまでの全期間を通じてどのように変容していったか長期的に見る方向になってきている。また、様々な評価の仕方に取り組む動きもある。

今回評価については議論を十分に尽くせなかったので、後々いろいろな機会を持ち、さらに議論を深めていきたいと思う。

(3)全体会 17:00~18:00

①各ダイアログの報告

■ダイアログ 1 サステナブルな地域をつくるために…公共性・経済性という指標

リユースびんを活用し循環型社会を構築する「めぐる」プロジェクト

NPO 法人中部リサイクル運動市民の会 代表理事 永田秀和氏

我々は2つのコンセプトをウリにして「めぐる」プロジェクトの活動をしている。

1 つが生ごみをリサイクルした堆肥を使ってお米を作ってお酒を造っている、食品リサイクル。もう一つがリユースびんの普及。この2つを売りにして日本酒を売っているが、それでは売れないとはっきり言われた。アドバイスとしては5つ。1つ目はコンセプトと切り離して売っていく必要があること。日本酒を買う時は味で決めるため、リユースびんに共感をして酒を買う消費者はいない

ためである。2つ目に「生ごみのリサイクル」とラベルに書いてある表現もイメージの良いものに変え、消費者目線できちんとコンセプトを伝えて行く必要があるということ。3つ目にターゲットをしぼること。「めぐる」は日本酒なので居酒屋などに売り込もうとしているが、環境をテーマにしたお酒でもあるため、例えば有機野菜を販売している店舗、フェアトレードのお店など、地産地消をコンセプトとしているお店にきちっとターゲットをしぼって売り込む必要があるのではないかとこと4つ目にストーリー性を売り物にすること。そういった環境に配慮した商品と言うことで、ストーリー性があるのでストーリーを買って頂くように他の酒蔵さんとかメーカーさんに売り込みながら、そのコンセプトに合った蔵で作って頂いて、それを例えば「めぐる」というブランドで売るとか、そういったストーリーを売り込むということも必要なのではないかということ。5つ目にリサイクル、リユースというコンセプトを外した時の売りを語れるようにすること。我々としてはリユースやリサイクルに思い入れのあるメンバーとプロジェクトやっているため、そこから中々抜けきれない。こういった多様な立場の方々から意見を頂くことで、本当に新鮮な意見を頂けたので、これを活かして商品が売れるような社会づくりをしていきたいと感じた。



ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築

高浜町まちづくり課 主査 米川浩司氏

我々はブルーフラッグと言う国際環境認証を利用して今の海を持続可能なものにつなげる活動をしている。色々意見頂いた中で一番の懸念は、その活動をどのように地元を広げるか。それに対して高浜のあるべき将来像を明確に持っていた方が良いという意見を聞いて、まさしくその通りだと感じた。

この取組みは目標ではなくて、あくまで持続可能なものにしていくための手段である。今は「海」と言って取り組んでいるが、海は山と繋がっている。山の恵みがあり海があるため、食をアピールした地域振興のアイデアも頂いた。そして高浜の色々なストーリーを活用した学習型観光。一番ドキッとしたのがプレゼンについてである。高浜に関するプレゼンを聞いた人たちが高浜に行きたいと思うような、自分の町を売り込めるようなプレゼンを考えていきたいと感じた。



里山と海を結ぶ「ひみ森の番屋」地域内エネルギー循環事業

越の国自然エネルギー推進協議会 理事 中川 透氏

富山県氷見市を拠点として里山保全、木質バイオマスエネルギー、特に薪作り、それからそういった里山のエネルギー資源を地域の温泉宿や、バイオマスボイラーとして使ってもらう。そこで低炭素が実現した中でカーボンオフセットという取組みを実施している。平成 25 年度は環境省の協働取組で活動し、今年度はカーボンオフセットの特定地域協議会で事業をしている。グループワークでは、それぞれの地域の協議会、もしくは企業で活躍されているベテランの方々にご意見を頂けた。今問題として直面しているのは、薪の出口が見えていないこと。協議会の会長の竹平邸にボイラーが導入されて、まさに今活用されているところだが、まだ薪を使う家が少ない。それに対してもっと他の団体と連携して、氷見市にエネルギービジョンという確固たるものを作り、提言すべきだと。長野県等はその提言が出来ており、そこに踏み込まなければという意見を頂いた。さらに里山は行政区域に関わらず繋がっている。そのため能登や岐阜県の流域の方とも交流をしながら広域関係をつくるという意見もあった。また活動もボランティアの満足感で動くものでなく、もっと氷見におけるメインストリームとなれという厳しい意見も頂いた。後はこの事業を継続していくうえで、地域密着できる情熱的な人材が必要だということ。最後にはカーボンオフセットについて、次年度は商品の開発 1 件当たり 50 万円の予算が出るため、そういう施策を活用し PR して、資金調達を上手にして活動を続けてほしいとのことだった。感想としては、**メインストリームになっていないのではという点で、我々のやる気を問われているなということを感じた。本気でやらなきゃいけないんだ**という気合を頂いた。



■ダイアログ 2 プロボノの可能性に迫る…サスピズの成功に向けて

株式会社ピー・エス・サポート 代表取締役 村田元夫氏

サステナブルビジネスを支援するために**プロボノが大事である**ということをテーマに話し合った。この地域には、プロボノ活動をされている方がほんの少しいるが、それだけではサスピズの支援ニーズには応えられない。どうしたらプロボノを増やすことが出来るのかという話し合いをした。事例としてプロボノを派遣している住友理工(株)の戸成氏、それからブラザー工業(株)の間瀬氏からの話があった。逆にサステナブルビジネスとしてプロボノを受け入れている岐阜県郡上市の NPO 法人メタセコイアの森の仲間たち、それから愛知県半田市の社会福祉法人むそうが受け入れた成果の話をした。さらに、プロボノ派遣にもそれぞれ壁がある。それは派遣する企業の壁、支援するプロボノの壁、そして受け入れる NPO 側の壁である。



派遣により支援する**プロボノの壁**としては、地域の壁が見えていない、NPO の価値観がみえていない、団体の実態やスタンスを理解するのに時間がかかる、色々アドバイスするがアクションに移せないアドバイスが多い、NPO の夢を共有できていない、プロボノへの対価が支払われないこと。派遣する企業側の壁としては、トップマネジメントの理解不足、人事部の予算が取りにくいこと、人材育成効果は見込めるが本業への効果が不安定で説得力が持てないこと、なぜサスピでなければいけないのか中々説明しきれないこと、それからプロボノの効果が見える化できていないこと、周りの企業が動かないと動き出さない企業があること、プロボノという言葉自体が中々浸透していきなり周囲を説得しにくいこと。NPO 側の壁としては、事業を担う組織として育っていない、ビジネス化に抵抗がある、アドバイスをアクションに変える人材が不足している、企業のスピード感についていけない、プロボノに対して経済的なメリットを提供できない、ビジネスの常識が通じないという意見が挙がった。

そして、本日のメインテーマである**企業の中の ESD 人材を増やすにはどうしたらいいのか**。すなわち、プロボノを増

やすにはどうしたら良いのか。一番のポイントはどこかという話し合いをした。プロボノ支援によってどれだけ社会的インパクトが出せるのか。どれだけ明確に説明できるかが大事だという意見があった。トップマネジメントに理解してもらうためには、プロボノ活動の社会的インパクトをきちんと説明することが欠かせない。加えて、トップマネジメントとしては、**プロボノ活動を通して自社が持っているノウハウを社会に役立てる道筋が見えると、社会課題に関わっていく意思決定ができるが、それが中々出来ていない**という課題が見えてきた。

具体的な解決方法としては 3 つあり、1 つ目は**プロボノの敷居、壁を低くして取り組む**こと。このアプローチで取り組んでいるのが瀬戸信用金庫である。参加の壁を低くすることでプロボノ人材は確かに増えている。2 つ目として、アドバイスして終わるだけでなく、**実務を肩代わりして取り組む**。プロボノのハードルを高く設定した住友理工(株)の取組みが挙げられる。3 つ目は、プロボノに拘らず、**社員ボランティアの数を増やしサビズを支援した方が効果的**であると仮説により、**ESD 人材を増やすアプローチ**が議論された。

最後に、来年度への提案として、ここに集まったメンバーだけでも多様なプロボノ活動を展開しているため、どこにどんなサービスがあり、いつ頃やっているのかということを整理する提言が、サービスグラントの嵯峨氏からあった。**プロボノ支援の見える化**を EPO 中部の役割として、提案された。もう 1 つ、**実際サビズが本当にプロボノを必要としているのか、必要としているのであれば、どうプロボノがどれくらいの人数必要なのか**ということをちゃんと調査した上で、**目標値を設定しプロジェクトを運営する必要がある**。これらを実行に移すため、来年度は**プロボノ活動の社会的インパクトを対外的に見える化する研究会**を、今日集まったメンバーで行うという提案があった。

■ダイアログ 3 ESD を地域で実践するために…仕組みづくりと評価

金沢大学環境保全センター長・教授 鈴木克徳氏

ESD を地域で実践するための仕組み作りと評価を議論した。ねらいは、ESD の取り組みを継続し、他地域に展開する為に ESD の評価と ESD の推進の為に体制を作ること、ESD 実践を支えるような地域基盤をどうやって形成するか議論すること、である。

活動内容は、環境省の持続可能な地域づくりを担う人材育成事業が 2 年間実施され、来年度引き続きにあたり、中部地方で行われた実践の話を行ったことである。その結果、色々新しい発見があった。例えば富山県の古沢小学校では、事業を通し身近にあったが今まで知らなかった地域の里山への関心を喚起することが出来た。子どもたちが自分達で議論するという学び方を大切にすることで、子どもたちの自信や自尊感情を高めることが出来た。また学校の先生に対して、ESD に熱心な先生と自覚の薄い先生もいること、或いは ESD に関わる理論が、学校で実践する上で弱いということがわかった。様々な制約を克服するためには校長先生のサポート、或いは家庭を巻き込み地域のサポートを貰うことが重要である。



また併せて子どもたちに発表の機会を与えることで子どもたち自らが考えるようになる。発表することで地域から評価してもらうことで、子どもたちの自信、自尊感情も高まる、そういう結果も生まれたとの指摘もあった。ESD を知らない先生も多いため、先生が ESD を学ぶ場を、出来れば大学の教員養成過程の中に組み込み確保することも重要であると指摘された。実際、例えば自然体験で現場に行く際に、自分の指導能力に対し強い不安を持つ先生が大変多い。ESD、特に自然体験に関わっていくにはそれなりの準備、先生方のトレーニングが重要だと指摘された。

それからキーワードとなった重要なことは、**地域と学校**をどうするかということと、**ESD の評価**をどうするかということであった。地域と学校との関係については、今回議論が深まった。学校が地域に出前授業を一方向的に頼みに行くだけでなく、地域からも学校に積極的にアプローチをすることも必要。また**地域の持続可能性**について学校の先生方はどこまで深く考えているのか。もし学校の先生方が地域の持続可能性を考えていないとしたら、どうやって子どもたちに授

業の場で ESD の重要性を伝えることが出来るのか。**地域の持続可能性という認識を、どう地域や学校で共有できるかという、双方向的な考え方が重要となるとの指摘**があった。

さらに**地域の SD が進んでいけば、ESD もずっと進んでいく**。地域の SD、持続可能性が議論されない中で、学校単位で ESD を教えるのは中々難しいという話が行われた。実際に学校と地域を結びつけようとする学校先生は大変忙しくなる。その際にどう先生を支援したら良いのか。1 つは **ESD コーディネーター**がいて、学校といろんな地域の方々を結ぶというやり方もある。もう 1 つは**対話のためのプラットフォーム**、みんなが情報を共有でき、人と人の活動を繋げられる場があれば良い。

もう一つ大きな議論があったのは、**学習指導要領での ESD の記載**についてである。これは非常に重要な動きだが、あんまり学習指導要領に書き込まれすぎると、そればかりやれば良いという、ESD 的でない考え方になるのではという議論もあった。どこまで盛り込み、どのように活用していくかということについては、現場との判断を踏まえて今後も議論する必要がある。ESD の評価については議論する時間がなかった。

②全員参加型コミュニケーション TIME

「2015 年度、あなたは、持続可能な社会をつくるために、「本気」でなにをしますか。」

今日のダイアログに参加しての気づきや感想を伝えあう時間にする。同じダイアログに参加していなかった方と前後左右で 2～3 名でお願いしたい。

■今日の感想と気づき

嵯峨 生馬氏 (NPO 法人サービスグラント 代表理事)

マルチステークホルダーダイアログということで色んな方が参加していたが、このような場は全く違う立場の人が参加しているため、論点がかみ合わないという危険性が常にある。しかしこういう人たちが出会い、場を作るということは大事だと思うので、**継続していくと良い**と思う。1 つ言えるのは、**これが単に話し合って終わりという風にならないことが大事**。ここから何か次のアクションが、小さなものでもいいので生まれ、それを経験として積んでいかなければいけない。各ダイアログから 1 つずつ**何かアクションが生まれていき**、それが何か月後かに**ちょっとしたアクションになる**。そしてここにいる人たちに**レポートバックされる、循環を生み出すことが重要**。

プロボノに関しては、中部では既にプロボノを実践されている提供者、提供団体、企業が存在しているので、まずはそれを**目に見える形にすることが一歩**となると思う。ダイアログ 2 ではそういったことがシェアされたが、まだダイアログ 1、3 では中部地方でプロボノが何団体、何企業持っているのか知らない。まずはここに集まった人たちの間で**情報をシェア**するということが**とても大事**だと思う。

中里 茂氏 (環境カウンセラー)

以前金融機関に勤めていたこともあるので、今日は金融機関の視点からダイアログ 1 に参加した。皆さんの環境に対する思いは理解できるが、もし資金の必要があり金融機関にこの話を持って行っても**金融機関はお金を貸さない**だろうと思う。金融機関というのは預金者から預かったお金を必要とする人に融資するのが仕事であるが、何年後には貸したお金が全額戻らないと目的を果たしたことはない。今日の発表でビジョンそのものは素晴らしいと思うが、環境に良いというだけでは中々金融機関はお金を貸すことはな



い。金融機関の人はどちらかというと保守的な考え方が根強いが、**最近の金融機関は徐々にではあるが変わりつつある**。特に環境問題が重要視されている中、環境問題に一生懸命取り組んでいる人、環境に関心を持っている人に対しては様々な観点でサポートしようとする金融機関が増えてきている。**しっかりビジョンを立てて金融機関を納得させる計画**を持って行けば、金融機関も融資を増やしたいという思いがあるため、それは可能かと思う。私が参加した「めぐる」プロジェクトであるが、リユースも大事であるけれども日本酒という、おいしい水と美味しいお米で造られたものというイメージが強い。リユース品であるというだけでは消費者の賛同は得られないのではないかと思う。美味しいお酒という観点を持ちつつ環境にやさしい取り組みだということをうまく相手に伝わる必要があるのではと思った。それと私は学校で環境学習を行っているが、今日の ESD の話を聞いて、**伝え方を工夫**しなければいけないと思い、とても参考になった。

③まとめと今後について

千頭 聡氏（環境省中部環境パートナーシップオフィス運営会議座長/日本福祉大学教授）

今日は EPO が 3 年間取り組んできたことの最後のまとめであった。我々は**社会変革**をしたい。その時にこういうシンポジウムは、**先進事例をお互いに勉強し積み重ねることができる**。それはすごく大事だが、同時に地域を変えるには、**先進事例の積み重ね以外のアプローチも必要**になる。よく、10 人の百歩と 100 人の一步という言い方をする。10 歩行くメンバーはまさに今日の事例だと思うが、100 人の一步を進めるためのやり方は違うアプローチがあるかもしれない。今日の参加者と、**違う地域の方と議論する仕組みが必要**だということを痛感した。そういう意味で ESD の評価の議論があまり出来なかったが、**地域が ESD の評価を出来るようになったら最高**だと思う。学校で ESD をしてくれたおかげで地域の中にこんな人材が返って来てくれた、と地域の方が思ってくれるようになったら最高である。そういう意味では**地域をどう変えて行くか、議論が必要**だと思った。



もう一点。これもよく言われることだが、**みんなが元気にならないと話にならない**。プロボノも分かり易く言うと企業の組織の活性化のためである。CSR も絶対そうだと思う。ESD についても、学校や地域コミュニティの活性化など、**みんながどうしたら元気になるのか**ということ、**いつも考えて議論することが必要**だと感じた。

片岡和則氏（環境省中部地方環境事務所 課長補佐）

EPO 中部はこの 3 年間、協働化、事業化に取り組んできた。ダイアログ 2 で嵯峨氏が、非営利組織の成果は「**人の変化**」だという話をされた。これまでの事業で得られた成果は、来年度以降の EPO 事業に活かしたい。今年度は白書としてとりまとめたい。色々な地域の方たちが、**サステナブルな社会に向けて動き出す動機**になってほしい。本日の直接の成果として我々自身も変わったのかどうか、それぞれの成果があれば幸いである。

新海洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィスチーフプロデューサー）

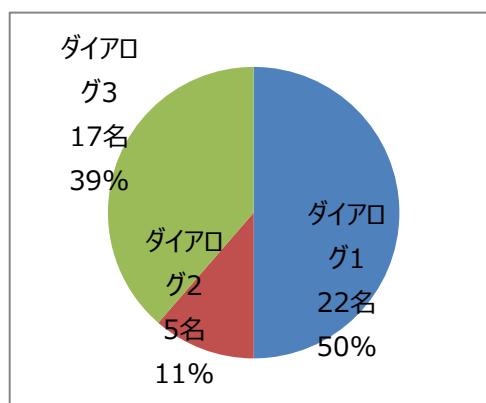
ありがとうございました。皆様から頂いた宿題はクリアしたい、課題は改善したい。それから EPO で出来ることは検討していきたい。また今後も忌憚ないご意見、厳しいご意見頂きたい。

参加者アンケート

アンケート回答者：44名/60名

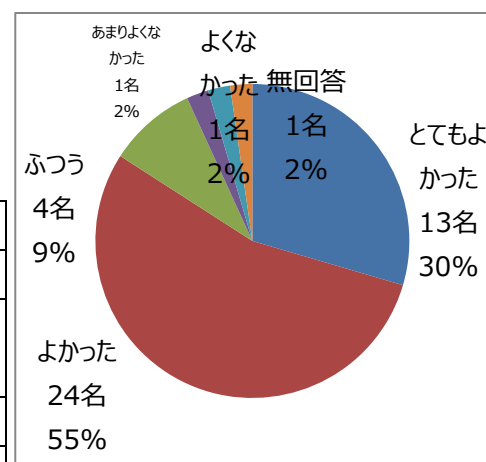
参加者内訳：

ダイアログ 1：22名 ダイアログ 2：5名 ダイアログ 3：17名



1. MSH ダイアログに参加されていかがでしたか。

ダイアログ	1	2	3	合計
とてもよかった	8名	0名	5名	13名
よかった	12名	3名	9名	24名
ふつう	1名	1名	2名	4名
あまりよくなかった	0名	0名	1名	1名
よくなかった	0名	1名	0名	1名
無回答	1名	0名	0名	1名
合計	22名	5名	17名	44名



■その理由をお聞かせください

【とてもよかった】

〈ダイアログ 1〉

- 様々な考え方が有効で参考になった
- さまざまな背景を持った方々と一つのテーマに関して意見交換できたので、いろいろな角度からの意見を聞くことが出来た
- 「本気」の意見が言えたので。
- きびしいご指摘ありがたいです
- 多くの方々の視点でのご意見をうかがい、とても参考になった。
- 多様な立場の方の活動やダイアログでは、ご意見アドバイス頂けて貴重な時間と機会をいただきました。
- 他を見る(評価することによって、自分達の足元が見えて来た
- 行政の目線では見えない問題や解決策を聞くことができた

〈ダイアログ 3〉

- “ダイアログ”できたこと。多様なバックグラウンド、経験を持つ人と話すことでみえてくるものがある
- 様々な立場から ESD の取組や考え方を聞くことができた。
- 今後の活動の参考になった
- いろいろな話が聞けてよかった

- ESD の自分なりの理解が深まったし、いろいろな先生のおもしろい考えを聞くことができた。

【よかった】

〈ダイアログ 1〉

- 普段自分が関わっている課題ではなく、全く別の課題を客観的に検討することにより、自分の課題の解決のヒントを得ることができました。
- 様々な立場の方とお話できてためになった。
- 現状について課題が明確になった。
- 多様な意見をいただいた
- 様々な取り組みとそれをめぐっての考察・意見を聞いて参考になった
- 3つの事例を知れたこと。ダイアログに参加できない事例も知れた。くわしくグループで意見交換できたこと
- いろいろな立場の人たちから意見をもらえ、参考になった。
- 十人十色様々な考えがあることを知り、勉強になった
- 色々な立場の人から話を聞いたこと、但しテーマに比べ時間が細かく、もの足りない感も残った

〈ダイアログ 2〉

- プロボノというとりくみがあるということが目からうろこでした。
- 各企業・NPO の意見・思いが聞いて良かった

〈ダイアログ 3〉

- 多くの方々の意見をお聞きして、ESD の意味、課題など改めて共有でき、今後の自分の活動の方向を再確認することができた
- いろんな立場の人々の考えを共有できた
- 本校がやろうとしたことを先行実施されており、大変参考になった。
- 教育現場の様々な声を聞くことができました
- 様々な取り組みの事例を知ることができたから
- 地域との連携の大切さを改めて感じることもできたから
- ESD の推進について悩んでいたもので、広くいろいろな情報が得られた。

【ぶつ】

〈ダイアログ 1〉

- 濃い内容でしたが、レベルが高く、内容を十分把握しきれませんでした。ただ専門家や色々な立場の人が討論することはとても有意義だと思いました。

〈ダイアログ 3〉

- 全体の構成に課題。話す人が多すぎる。もっと対話型になると良い。

【あまりよくなかった】

〈ダイアログ 3〉

- 議論があまり深まっていない

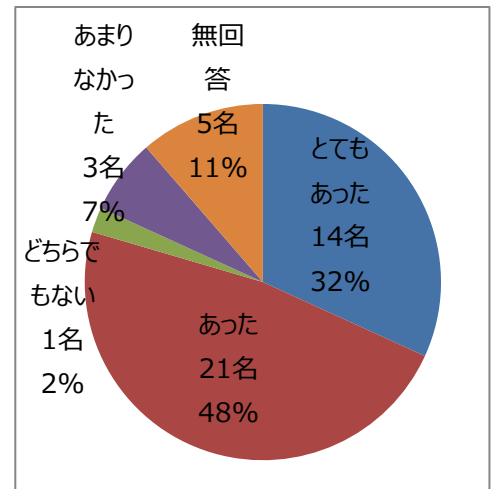
【よくなかった】

〈ダイアログ 2〉

- 階が違って各ダイアログは別々にした方がよい。うるさくて聞きとれない。(準備が大変でしょうが)

2. 参加されたダイアログから得たことはありましたか。

ダイアログ	1	2	3	合計
とてもあった	10名	0名	4名	14名
あった	8名	3名	10名	21名
どちらでもない	0名	0名	1名	1名
あまりなかった	1名	1名	1名	3名
なかった	0名	0名	0名	0名
無回答	3名	1名	1名	5名
合計	22名	5名	17名	44名



その内容をお聞かせください

【とてもあった】

〈ダイアログ 1〉

- 立場が違くと認識が違う。
- 地域起こしの共通理解に対して別のアングルから対話して気づきを得た
- 上に同じ(他を見る(評価する)ことによって、自分達の足元が見えて来た)
- 行政が率先してセールストークを行うのが大切
- NPOと企業の考え方のちがい
- 普段の目線とは違うところでの提案だったので、今後使っていける。
- 様々な考えを知ることができた。刺激を受けることができた
- 具体的な取組事例が沢山聞いて今後の活動に大変参考になりそうである。

〈ダイアログ 3〉

- 同上(“ダイアログ”できたこと。多様なバックグラウンド、経験を持つ人と話すことでみえてくるものがある)
- ESDの評価や地域とのつながり方についていろいろな立場の方から話を聞き、新しい考え方を知ることができた。
- 地域の仕組みの大切さ、ESDの理念のあいまいさ
- 地域とつなぐ方法が1つしか見えていない所があったが、新しいものがわかってきた。

【あった】

〈ダイアログ 1〉

- 「今」の形にこだわりすぎることなく、目的を達するにはどうしたら良いか？を十分な時間をかけて議論でき、ゼロから考えること組み立てなおすことの重要性が分かった。
- 「公共性」や「経済性」の基本的な考え方
- 外部へのアピールについて再認識
- 多様な観点を知ることができた
- “学習型観光”の可能性を感じた
- 色々な活動事例。中部の色々な人と会えたのは良かったと思います。

〈ダイアログ 2〉

- 瀬戸信金様・ブラザー様の話を聞いて良かった。
- プロボノを提供・供給する、される実情を知る事ができた
- 大企業の積極的な関与が必要かもしれません

〈ダイアログ 3〉

- 学校の内情、教師の立場がわかった。
- 1に同じ(多くの方々の意見をお聞きして、ESD の意味、課題など改めて共有でき、今後の自分の活動の方向を再確認することができた)
- 各地域での実践事例
- ESD の学校教育への取り入れ方
- 教育現場の大変さ、そこに NPO としてどう手助けできるか。
- 今まで、ぼんやりとしか ESD の考え方を理解できていなかったが、少しは理解が深まった。
- 教員養成から ESD に関する学びを取り入れる必要性
- 認識の共有(制度、ESD の理論などの課題)
- 環境省プロジェクトから得られたものの総括、学校と地域については理解できた。ESD の評価については十分時間がなかった。

【あまりなかった】

〈ダイアログ 1〉

- もっと「本当の成功事例」が欲しい。元気にするような

〈ダイアログ 2〉

- プロボノの取り組みは理解できたが、中小企業と大企業の間、思想の違いが大きすぎる(分けた方がよい)

【無回答】

〈ダイアログ 1〉

- マーケティングの見直し、ステークホルダーの洗い出し、win-win の関係づくり

〈ダイアログ 2〉

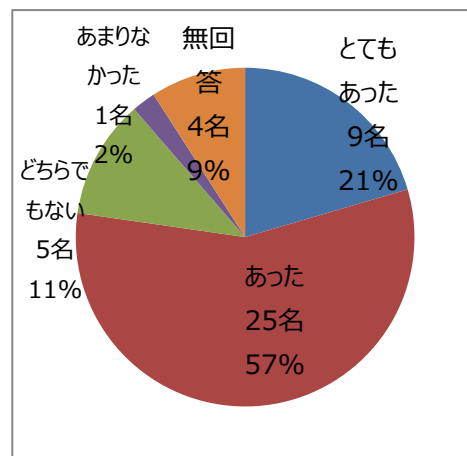
- 大企業でないとむずかしいイメージがあります

〈ダイアログ 3〉

- 県によって ESD の定着度が異なる。地域で ESD 協働事例が参考になった

3. MSH ダイアログに参加して、気づいたこと、参考になったことはありましたか。

ダイアログ	1	2	3	合計
とてもあった	7名	0名	2名	9名
あった	11名	3名	11名	25名
どちらでもない	2名	1名	2名	5名
あまりなかった	0名	0名	1名	1名
なかった	0名	0名	0名	0名
無回答	2名	1名	1名	4名
合計	22名	5名	17名	44名



■その理由、内容についてご記入ください

【とてもあった】

〈ダイアログ 1〉

- メインストリームに乗っていないと感じた。人に意見があり、参考になった。通販とか考えているか。Marketing channel 戦略
- 色々な活動をしている人を知れたので
- プロボノの存在を知っただけでも良かった

〈ダイアログ 3〉

- ESD が先生が実践する上で理論的に整理が足りていない。キーワード、概念だけでは浸透しない。
- NPO や学校、行政の立場で ESD に取り組んでいる内容を知る事ができた

【あった】

〈ダイアログ 1〉

- 日頃やはり自分目線でしか見ていない
- 自己満足の大人が多い
- 当事者以外の視点はかなり新鮮なものがあり、既存の方向修正に大いに資するものがある
- 多くの方々のつながりの場としてこういった催しは大事ですね
- それぞれの活動には共通の悩み、課題があるということに気づいた。
- 希望ある課題はいろんなところにある
- 一つの事象に多様な観点、視点を入れる大切さ
- 若い人の意見が足りない。成功事例が足りない

〈ダイアログ 2〉

- 自社自分の事業・業務のふりかえりになった。
- 同上(プロボノを提供・供給する、される実情を知る事ができた)
- ESD を地域ですすめる必要があると思います。

〈ダイアログ 3〉

- 自分の立場で何ができるのか。何をすべきなのか考えさせられた。
- 評価の方法を理解できた。

- 3つのダイアログの参加メンバーを固定せず、分野を越えて参加できる方が新たな発見や認識が生まれるのではないか
- 他のセッションと協働、共有がより欲しかった
- プレゼンの重要性を再認識できた。
- ESDは幅広い視点で取り組めること、現在あるものを生かせばよいこと。
- 悩みは同じでなんだ。
- 対話の機会がまだ少なすぎると改めて認識した。

【ふつう】

〈ダイアログ 1〉

- 初めての参加だったため

〈ダイアログ 2〉

- プロボノの情報を得た。

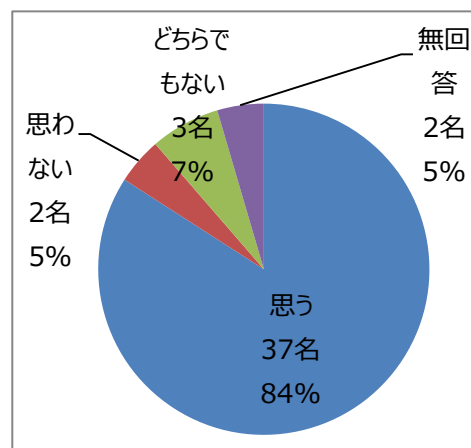
【無回答】

〈ダイアログ 2〉

- いろいろな意見があってよいと思います。

4. 今後、協働や ESD に関する MSH ダイアログに参加したいと思いますか

ダイアログ	1	2	3	合計
思う	20名	3名	14名	37名
思わない	0名	1名	1名	2名
どちらでもない	1名	1名	1名	3名
無回答	1名	0名	1名	2名
合計	22名	5名	17名	44名



■その理由をお聞かせください。

(思う、と答えられた方、どのようなテーマだとより参加したいと思われませんか)

【思う】

〈ダイアログ 1〉

- ESDを勉強し、導入していきたい
- 事例発表
- 地域で様々な活動する団体に協働取組事業という支援があることをもっと社会にPRしていただきたい。
- 1、2、3が本気でお互いのクライアントとなるミッション
- 協働そのものが効果を上げ、サステナブルであるためにはどうすれば？多くのプログラムが思いつきと単年の活動で終わってしまう。
- 自分と異なる考えを知りたいから。どのようなテーマだとより参加したいか？→若手のみの会
- 熱い方々の話を聞くと元気になる！！
- 協働取組やNPO活動の成果をいかにPRして賛同を得るか
- 他県の事例を知りたい

- もっともっと地域の取り組みを共有していきたい
- プロボノでお話しされた方の視点が面白かった。大きな流れ+現実的な対応と。
- ビジネス、まちづくり、再生可能エネルギー
- 来年どうなったかの変化が見たい。
- 勉強になるため。知識を高めることができるため
- いろいろな活動を知ることができるから

〈ダイアログ 2〉

- ESD についてももっといろいろききたいです。そしてできることが知りたいです。
- サスビズ・ESD など自社にあったもの
- 地域資源を活用した商品開発

〈ダイアログ 3〉

- 地域との連携のあり方について
- ESD をもっとせめたいですね
- 仲間といっしょに参加してみたい。
- 持続可能な社会づくり(町内会のあり方)
- 共存しあう、刺激しあうことはとても大事
- ユネスコスクールの登録もあり、参考になった。
- 他のダイアログも面白そうだから。
- 広く多くの人と ESD を考えるよい機会
- 継続は力と考えるため。今回の反省を次回に活かせると良いと思います。
- 今後の実践へのヒントを得られることに期待
- ESD についてももっといろいろききたいです。そしてできることが知りたいです。
- サスビズ・ESD など自社にあったもの
- 地域資源を活用した商品開発

【思わない】

〈ダイアログ 2〉

- 有益な情報が得られるとは思いますが、自己の業務量と比して相対的に時間が取れない。

【どちらでもない】

〈ダイアログ 1〉

- 時間調整できるか不明

〈ダイアログ 2〉

- 内容ではないが、特殊な集まり、空間という印象が強い。広めていく意味でももう少し参加者目線を考えた方がいい。

5. 今後 MSH ダイアログを実施する際の改善点、知りたいこと、ご希望の内容があればお聞かせください

〈ダイアログ 1〉

- 1 つの部屋を 2 つの分科会で使用するのは無理がある。気が散ってしまう。運営側の大きなミス
- 時間的にキツかったと思います。もっと多くの人々と交流できる場があると良いと思います。ワールドカフェ方式も採り入れてはどうでしょうか。
- ESD : 地域の持続可能性、初めて聞く言葉だった

- 座ってみたら企業の人不在だった。後からの気づき
- 第1分科会では第2分科会の声ももれてきていて、とてもきとりにくい環境でした。会場は分けるべき。
- 部屋は完全に分けた方が良いと思います。
- セッション毎に部屋は別々の方がいい(声が聞こえてしまう)
- 再生可能エネルギーにかかわっているが、まさに設備産業であり、市民活動では手におえない部分がある。一方行政がサイのままではサステナブルな運動とならない。解がでるようなダイアログがしたい。
- 間仕切りで隣の人の声が聞こえ、集中できなかった。今後は個室にして欲しい
- 一般参加が可能であるか？告知をもっとオープンになされると良いと思いました。
- 4と同じ(1,2,3が本気でお互いのクライアントとなるミッション)
- 一概には言えないが、もう少しじっくり型で議論をつくるような時間的余裕がほしい

〈ダイアログ2〉

- 対話できたらよかったです。
- 第3回目からの参加なので内容が分かる資料が欲しい。
- 特にありません。

〈ダイアログ3〉

- ダイアログを関係者のみに固定しない。あるいは後半をシャッフルする
- 時間が短かったのでもう少しダイアログに時間がほしかったです。
- 熱い語り合いをもっと取り入れたいです。
- ESDの具体化、見える化、行動へとつなげるための仕組み
- 学校ESDと地域のESDと一緒に議論、交流したい
- ESDの実証授業をやった教師同士の情報交換会
- ESDの話で教育関係者の多く話がかたよった。SDをつくるダイアログ1,2のメンバーとミックスしてもらいたいと思う。
- face to faceの対話の機会

6. 協働取組による、持続可能な社会づくりには、「ずばり！」何が必要だと思われますか。

〈ダイアログ1〉

- 成果の「見える化」とそのPR
- お金
- 「本物」「プレゼンカ」「ブランド化」「利益」
- 相手の立場を思いやること。話し合い。
- 人、地域、金
- 情熱
- 継続
- 人づくり、人つなぎ、人つむぎ
- やる気！逃げない！
- 熱意、頑張る人が報われる仕組み
- 行動する個人
- 市民のパッション←(教育ESD、経産省と環境省のコラボ?)→行政TOPの思いとトップダウンカ
- 行動すること、思いのある人を集めること

- 本気で決断して行動する！！
- 大学などにおける単位化、インターンまで高められればと思った。
- 共感。そのためのセールス
- 関係者全員(官民産学)が納得する大局的なビジョンを共有することからスタートする

〈ダイアログ 2〉

- 想い！
- “継続”だと思います。
- 継続と地道な発信

〈ダイアログ 3〉

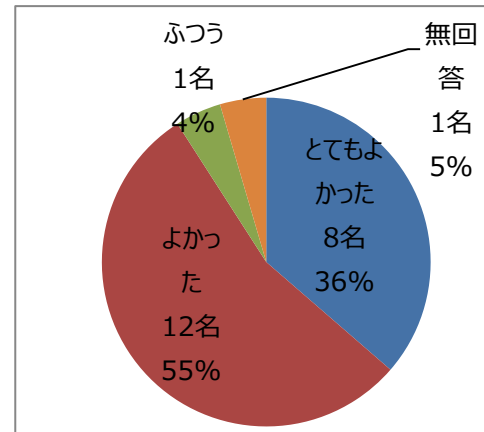
- 教育(人材育成含む)と経済性
- 相手に視線をあわせていないにコミュニケーションする姿勢("知っててあたり前"という態度をとらない)
- 学び合う場
- コミュニティ能力
- NPO の確立！
- 人材！！
- 自分の住んでいる地域を愛する気持ち、誇りに思う気持ち
- やる気を起こさせる“きっかけ”
- 社会教育、特に公民館など既存の体制への働きかけによる地域住民の SD 実現の主体となるような取り組み
- 共通認識としての「持続可能な社会」とは何か？ESD の目指す方向性かな
- 助け合いとずうずうしさ
- 人材育成
- がんばりすぎないこと！
- 大人が SD の取り組みを真剣に進める→仕事になる

参加者アンケート(ダイアログ1)

【アンケート回答者：22名/24名】

1. MSH ダイアログに参加されていたいかがでしたか。

とてもよかった	8名
よかった	12名
ふつう	1名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	0名
無回答	1名
合計	22名



■その理由をお聞かせください

【とてもよかった】

- 様々な考え方が有効で参考になった
- さまざまな背景を持った方々と一つのテーマに関して意見交換できたので、いろいろな角度からの意見を聞くことが出来た
- 「本気」の意見が言えたので。
- きびしい指摘ありがたいです
- 多くの方々の視点でのご意見をうかがい、とても参考になった。
- 多様な立場の方の活動やダイアログでは、ご意見アドバイス頂けて貴重な時間と機会をいただきました。
- 他を見る(評価する)ことによって、自分達の足元が見えて来た
- 行政の目線では見えない問題や解決策を聞くことができた

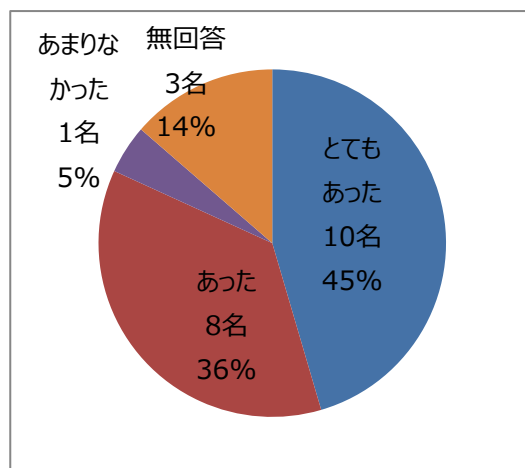
【よかった】普段自分が関わっている課題ではなく、全く別の課題を客観的に検討することにより、自分の課題の解決のヒントを得ることができました。

- 様々な立場の方とお話できてためになった。
- 現状について課題が明確になった。
- 多様な意見をいただいた
- 様々な取り組みとそれをめぐっての考察・意見を聞いて参考になった
- 3つの事例を知れたこと。ダイアログに参加できない事例も知れた。くわしくグループで意見交換できたこと
- いろいろな立場の人たちから意見をもらえ、参考になった。
- 十人十色様々な考えがあることを知り、勉強になった
- 色々の立場の人から話を聞いたこと、但しテーマに比べ時間が細かく、もの足りない感も残った

【ふつう】濃い内容でしたが、レベルが高く、内容を十分把握しきれませんでした。ただ専門家や色々な立場の人が討論することはとても有意義だと思いました。

2. 参加されたダイアログから得たことはありましたか。

とてもあった	10名
あった	8名
どちらでもない	0名
あまりなかった	1名
なかった	0名
無回答	3名
合計	22名



■その内容をお聞かせください

【とてもあった】

- 立場が違くと認識が違う。
- 地域起こしの共通理解に対して別のアングルから対話して気づきを得た
- 上に同じ(他を見る(評価する)ことによって、自分達の足元が見えて来た)
- 行政が率先してセールストークを行うのが大切
- NPOと企業の考え方のちがい
- 普段の目線とは違うところでの提案だったので、今後使っていける。
- 様々な考えを知ることができた。刺激を受けることができた
- 具体的な取組事例が沢山聞けて今後の活動に大変参考になりそうである。

【あった】

- 「今」の形にこだわりすぎることなく、目的を達するにはどうしたら良いか？を十分な時間をかけて議論でき、ゼロから考えること組み立てなおすことの重要性が分かった。
- 「公共性」や「経済性」の基本的な考え方
- 外部へのアピールについて再認識
- 多様な観点を知ることができた
- “学習型観光”の可能性を感じた
- 色々な活動事例。中部の色々な人と会えたのは良かったと思います。

【あまりなかった】

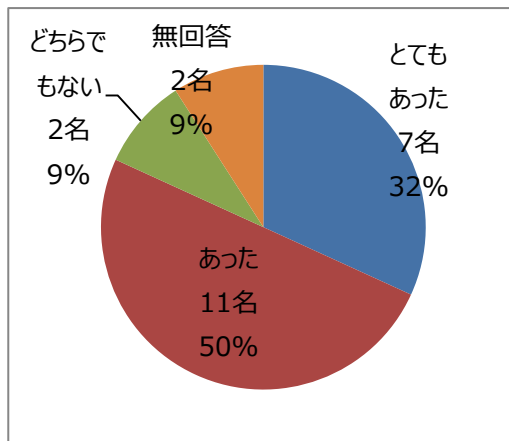
- もっと「本当の成功事例」が欲しい。元気になるような

【無回答】

- マーケティングの見直し、ステークホルダーの洗い出し、win-winの関係づくり

3. MSH ダイアログに参加して、気づいたこと、参考になったことはありましたか。

とてもあった	7名
あった	11名
どちらでもない	2名
あまりなかった	0名
なかった	0名
無回答	2名
合計	22名



■その理由、内容についてご記入ください

【とてもあった】

- メインストリームに乗っていないと感じた。人に意見があり、参考になった。通販とか考えているか。Marketing channel 戦略
- 色々な活動をしている人を知れたので
- プロボノの存在を知っただけでも良かった

【あった】

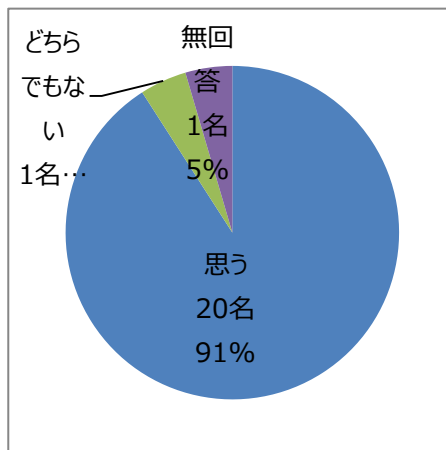
- 日頃やはり自分目線でしか見ていない
- 自己満足の大人が多い
- 当事者以外の視点はかなり新鮮なものがあり、既存の方向修正に大いに資するものがある
- 多くの方々のつながりの場としてこういった催しは大事ですね
- それぞれの活動には共通の悩み、課題があるということに気づいた。
- 希望ある課題はいろんなところにある
- 一つの事象に多様な観点、視点を入れる大切さ
- 若い人の意見が足りない。成功事例が足りない

【ふつう】

- 初めての参加だったため

4. 今後、協働やESDに関するMSHダイアログに参加したいと思いますか

思う	20名
思わない	0名
どちらでもない	1名
無回答	1名
合計	22名



■その理由をお聞かせください。(思う、と答えられた方、どのようなテーマだとより参加したいと思われませんか)

【思う】

- ESD を勉強し、導入していきたい
- 事例発表
- 地域で様々な活動する団体に協働取組事業という支援があることをもっと社会に PR していただきたい。
- 1、2、3 が本気でお互いのクライアントとなるミッション
- 協働そのものが効果を上げ、サステナブルであるためにはどうすれば？多くのプログラムが思いつきと単年の活動で終わってしまう。
- 自分と異なる考えを知りたいから。どのようなテーマだとより参加したいか？→若手のみのか
- 熱い方々の話を聞くと元気になる！！
- 協働取組や NPO 活動の成果をいかに PR して賛同を得るか
- 他県の事例を知りたい
- もっともっと地域の取り組みを共有していきたい
- プロボノでお話しされた方の視点が面白かった。大きな流れ＋現実的な対応と。
- ビジネス、まちづくり、再生可能エネルギー
- 来年どうなったかの変化が見たい。
- 勉強になるため。知識を高めることができるため
- いろいろな活動を知ることができるから

【どちらでもない】

- 時間調整できるか不明

5. 今後 MSH ダイアログを実施する際の改善点、知りたいこと、ご希望の内容があればお聞かせください

- 1つの部屋を2つの分科会で使用するのは無理がある。気が散ってしまう。運営側の大きなミス
- 時間的にキツかったと思います。もっと多くの人々と交流できる場があるといいと思います。ワールドカフェ方式も採り入れてはどうでしょうか。
- ESD：地域の持続可能性、初めて聞く言葉だった
- 座ってみたら企業の人不在だった。後からの気づき
- 第1分科会では第2分科会の声ももれてきていて、とてもききとりにくい環境でした。会場は分けるべき。
- 部屋は完全に分けた方が良くと思います。
- セッション毎に部屋は別々の方がいい(声が聞こえてしまう)
- 再生可能エネルギーにかかわっているが、まさに設備産業であり、市民活動では手におえない部分がある。一方行政がサイロのままではサステナブルな運動とならない。解がでるようなダイアログがしたい。
- 間仕切りで隣の人の声が聞こえ、集中できなかった。今後は個室にして欲しい
- 一般参加が可能であるか？告知をもっとオープンになされると良いと思いました。
- 4に同じ(1,2,3が本気でお互いのクライアントとなるミッション)
- 一概には言えないが、もう少しじっくり型で議論をつくるような時間的余裕がほしい

6. 協働取組による、持続可能な社会づくりには、「ずばり！」何が必要だと思われますか。

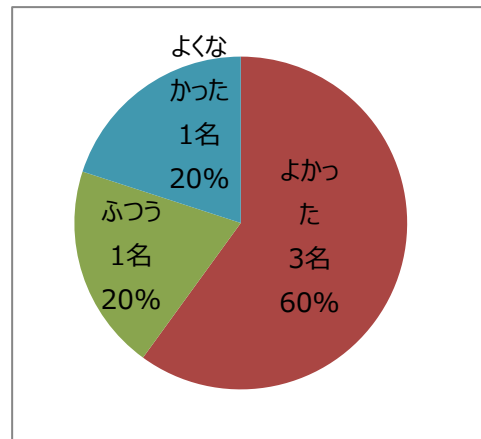
- 成果の「見える化」とその PR
- お金
- 「本物」「プレゼンカ」「ブランド化」「利益」
- 相手の立場を思いやること。話し合い。
- 人、地域、金
- 情熱
- 継続
- 人づくり、人つなぎ、人つむぎ
- やる気！逃げない！
- 熱意、頑張る人が報われる仕組み
- 行動する個人
- 市民のパッション←(教育 ESD、経産省と環境省のコラボ?)→行政 TOP の思いとトップダウンカ
- 行動すること、思いのある人を集めること
- 本気で決断して行動する！！
- 大学などにおける単位化、インターンまで高められればと思った。
- 共感。そのためのセールス
- 関係者全員(官民産学)が納得する大局的はビジョンを共有することからスタートする

参加者アンケート(ダイアログ2)

【アンケート回答者：5名/17名】

1. MSH ダイアログに参加されていたかがでしたか。

とてもよかった	0名
よかった	3名
ふつう	1名
あまりよくなかった	0名
よくなかった	1名
無回答	0名
合計	5名



【よかった】

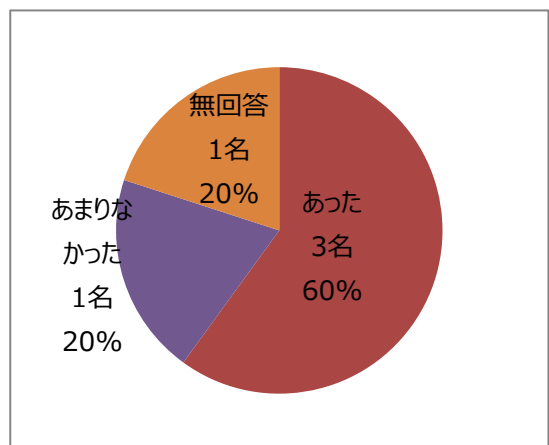
- プロボノというとりみがあるということが目からうろこでした。
- 各企業・NPO の意見・思いが聞けて良かった

【よくなかった】

- 階が違って各ダイアログは別々にした方がよい。うるさくて聞きとれない。(準備が大変でしょうが)

2. 参加されたダイアログから得たことはありましたか。

とてもあった	0名
あった	3名
どちらでもない	0名
あまりなかった	1名
なかった	0名
無回答	1名
合計	5名



■その内容をお聞かせください

【あった】の回答者

- 瀬戸信金様・ブラザー様の話を聞いて良かった。
- プロボノを提供・供給する、される実情を知ることができた
- 大企業の積極的な関与が必要かもしれません

【あまりなかった】の回答者

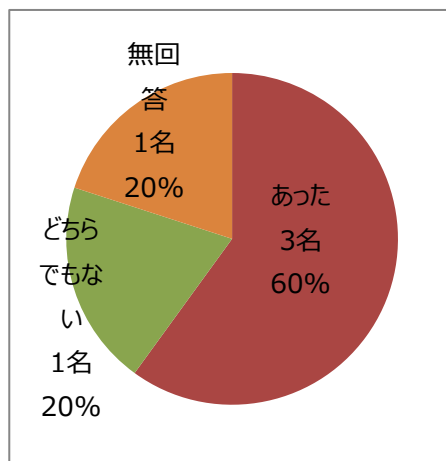
- プロボノの取り組みは理解できたが、中小企業と大企業の環境、思想の違いが大きすぎる(分けた方がよい)

【無回答】の回答者

- 大企業でないとむずかしいイメージがあります

3. MSH ダイアログに参加して、気づいたこと、参考になったことはありましたか。

とてもあった	0名
あった	3名
どちらでもない	1名
あまりなかった	0名
なかった	0名
無回答	1名
合計	5名



■その理由、内容についてご記入ください

【あった】

- 自社自分の事業・業務のふりかえりになった。
- 同上(プロボノを提供・供給する、される実情を知る事ができた)
- ESD を地域ですすめる必要があると思います。

【ふつつ】

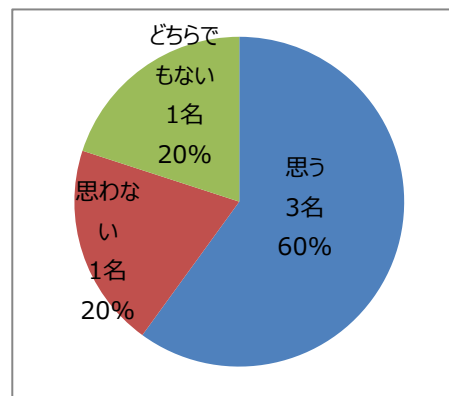
- プロボノの情報を得た。

【無回答】

- いろいろな意見があつてよいと思います。

4. 今後、協働や ESD に関する MSH ダイアログに参加したいと思いますか

思う	3名
思わない	1名
どちらでもない	1名
無回答	0名
合計	5名



■その理由をお聞かせください。

(思う、と答えられた方、どのようなテーマだとより参加したいと思われませんか)

【思う】

- ESD についてももっといろいろききたいです。そしてできることが知りたいです。
- サスビズ・ESD など自社にあったもの
- 地域資源を活用した商品開発

【思わない】

- 有益な情報が得られるとは思いますが、自己の業務量と比して相対的に時間が取れない。

【どちらでもない】

- 内容ではないが、特殊な集まり、空間という印象が強い。広めていく意味でももう少し参加者目線を考えた方がいい。

5. 今後 MSH ダイアログを実施する際の改善点、知りたいこと、ご希望の内容があればお聞かせください

- 対話できたらよかったです。
- 第 3 回目からの参加なので内容が分かる資料が欲しい。
- 特にありません。

6. 協働取組による、持続可能な社会づくりには、「ずばり！」何が必要だと思われますか。

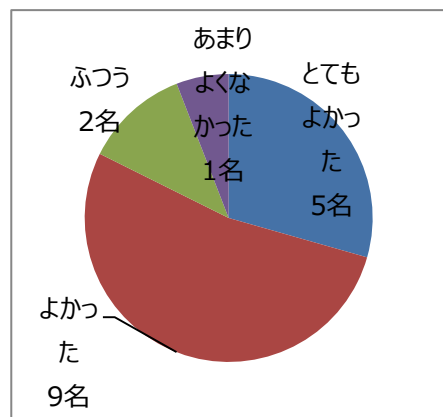
- 想い！
- “継続”だと思います。
- 継続と地道な発信

参加者アンケート(ダイアログ3)

【回答者：17名/19名】

1. MSH ダイアログに参加されていかがでしたか。

とてもよかった	5名
よかった	9名
ふつう	2名
あまりよくなかった	1名
よくなかった	0名
無回答	0名
合計	17名



【とてもよかった】

- "ダイアログ"できたこと。多様なバックグラウンド、経験を持つ人と話すことでみえてくるものがある。
- 様々な立場から ESD の取組や考え方を聞くことができた。
- 今後の活動の参考になった。
- いろいろな話が聞けてよかった。
- ESD の自分なりの理解が深まったし、いろいろな先生のおもしろい考えを聞くことができた。

【よかった】

- 多くの方々の意見をお聞きして、ESD の意味、課題など改めて共有でき、今後の自分の活動の方向を再確認することができた。
- いろんな立場の人々の考えを共有できた。
- 本校がやろうとしたことを先行実施されており、大変参考になった。
- 教育現場の様々な声を聞くことができました。
- 様々な取り組みの事例を知ることができたから。
- 地域との連携の大切さを改めて感じることができたから。
- ESD の推進について悩んでいたため、広くいろいろな情報が得られた。

【ふつう】

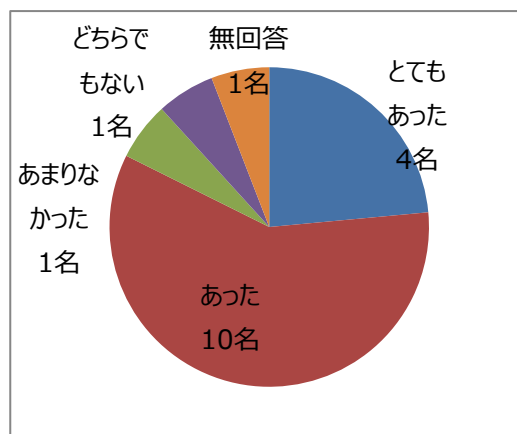
- 全体の構成に課題。話す人が多すぎる。もっと対話型になると良い。

【あまりよくなかった】

- 議論があまり深まっていない。

2. 参加されたダイアログから得たことはありましたか。

とてもあった	4名
あった	10名
どちらでもない	1名
あまりなかった	1名
なかった	0名
無回答	1名
合計	17名



■その内容をお聞かせください

【とてもあった】

- 同上(“ダイアログ”できたこと。多様なバックグラウンド、経験を持つ人と話すことでみえてくるものがある)
- ESD の評価や地域とのつながり方についていろいろな立場の方から話を聞き、新しい考え方を知ることができた。
- 地域の仕組みの大切さ、ESD の理念のあいまいさ。
- 地域とつなぐ方法が 1 つしか見えていない所があったが、新しいものがわかってきた。

【あった】

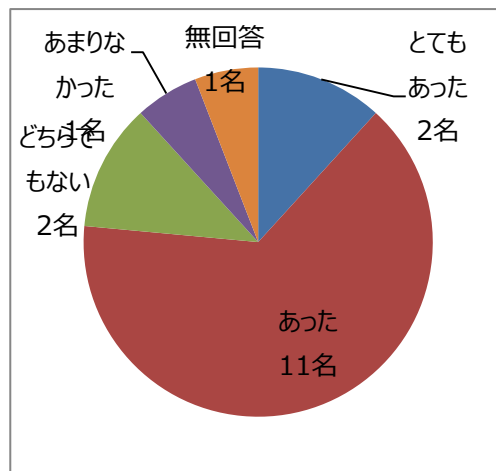
- 学校の内情、教師の立場がわかった。
- 1に同じ(多くの方々の意見をお聞きして、ESDの意味、課題など改めて共有でき、今後の自分の活動の方向を再確認することができた)
- 各地域での実践事例。
- ESD の学校教育への取り入れ方。
- 教育現場の大変さ、そこに NPO としてどう手助けできるか。
- 今まで、ぼんやりとしか ESD の考え方を理解できていなかったが、少しは理解が深まった。
- 教員養成から ESD に関する学びを取り入れる必要性。
- 認識の共有(制度、ESD の理論などの課題)。
- 環境省プロジェクトから得られたものの総括、学校と地域については理解できた。ESD の評価については十分時間がなかった。

【無回答】

- 県によって ESD の定着度が異なる。地域で ESD 協働事例が参考になった。

3. MSH ダイアログに参加して、気づいたこと、参考になったことはありましたか。

とてもあった	2名
あった	11名
どちらでもない	2名
あまりなかった	1名
なかった	0名
無回答	1名
合計	17名



■その理由、内容についてご記入ください

【とてもあった】

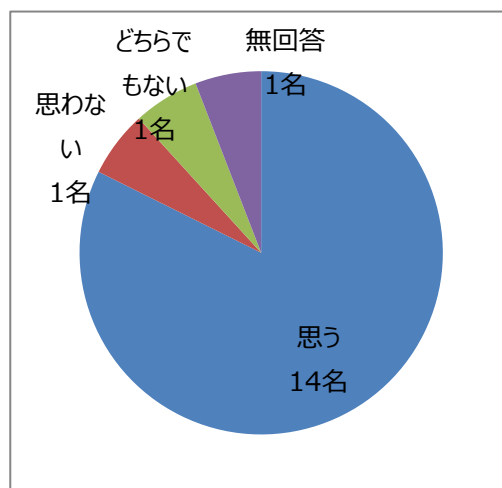
- ESD が先生が実践する上で理論的に整理が足りていない。キーワード、概念だけでは浸透しない。
- NPO や学校、行政の立場で ESD に取り組んでいる内容を知る事ができた。

【あった】

- 自分の立場で何ができるのか。何をすべきなのか考えさせられた。
- 評価の方法を理解できた。
- 3つのダイアログの参加メンバーを固定せず、分野を越えて参加できる方が新たな発見や認識が生まれるのではないか。
- 他のセッションと協働、共有がより欲しかった。
- プレゼンの重要性を再認識できた。
- ESD は幅広い視点で取り組めること、現在あるものを生かせばよいこと。
- 悩みは同じでなんだ。
- 対話の機会がまだ少なすぎると改めて認識した。

4. 今後、協働や ESD に関する MSH ダイアログに参加したいと思いませんか

思う	14名
思わない	1名
どちらでもない	1名
無回答	1名
合計	17名



■その理由をお聞かせください。

(思う、と答えられた方、どのようなテーマだとより参加したいと思われませんか)

【思う】

- 地域との連携のあり方について
- ESD をもっとせめたいですね。
- 仲間といっしょに参加してみたい。

- 持続可能な社会づくり(町内会のあり方)
- 共存しあう、刺激しあうことはとても大事。
- ユネスコスクールの登録もあり、参考になった。
- 他のダイアログも面白そうだから。
- 広く多くの人と ESD を考えるよい機会。
- 継続は力と考えるため。今回の反省を次回に活かせると良いと思います。
- 今後の実践へのヒントを得られることに期待。
- ESD についてももっといろいろききたいです。そしてできることが知りたいです。
- サスビズ・ESD など自社にあったもの。
- 地域資源を活用した商品開発。

5. 今後 MSH ダイアログを実施する際の改善点、知りたいこと、ご希望の内容があればお聞かせください

- ダイアログを関係者のみに固定しない。あるいは後半をシャッフルする。
- 時間が短かったのもう少しダイアログに時間がほしかったです。
- 熱い語り合いをもっと取り入れたいです。
- ESD の具体化、見える化、行動へとつなげるための仕組み
- 学校 ESD と地域の ESD を一緒に議論、交流したい。
- ESD の実証授業をやった教師同士の情報交換会。
- ESD の話で教育関係者が多く話がかたよった。SD をつくるダイアログ 1,2 のメンバーとミックスしてもらいたいと思う。
- face to face の対話の機会

6. 協働取組による、持続可能な社会づくりには、「ずばり！」何が必要だと思われますか。

- 教育(人材育成含む)と経済性
- 相手に視線をあわせていないコミュニケーションする姿勢("知っててあたり前"という態度をとらない)
- 学び合う場
- コミュニティ能力
- NPO の確立！
- 人材！！
- 自分の住んでいる地域を愛する気持ち、誇りに思う気持ち
- やる気を起こさせる"きっかけ"
- 社会教育、特に公民館など既存の体制への働きかけによる地域住民の SD 実現の主体となるような取り組み・
- 共通認識としての「持続可能な社会」とは何か？ ESD の目指す方向性かな
- 助け合いとずうずうしさ
- 人材育成
- がんばりすぎないこと！
- 大人が SD の取り組みを真剣に進める→仕事になる。

■ 広報用のチラシ



2015年が始まった。私たちは日々未来社会をつくっている。
何を選択し、どう変化を生み出すか。
持続可能な社会の実現に向かって進んでいるのか。
試される日々である。

2014年11月、愛知名古屋でESDユネスコ世界会議が開催された。その最終日、閉会全体会で、愛知県内の小中学生が世界に向けてメッセージを読み上げた。

「私たちが考える『ESD』とは、『未来を考えて、行動すること』です。
みんながESDの主人公となって、今、これから、未来に向かって、ESDに取り組んでいきます。
私たちは本気です。大人のみなさんも、本気になってESDに取り組んでください」。

今年で3回目のステークホルダーダイアログ。
コンセプトは、「**大人が本気になる**」。

H27 **1/29** **木** 14:00 ~ 18:00
(13:30開場)

ウイングあいち 会議室 1104・1105

参加者	事前	対象
60名程度 Table 1 = 20名 Table 2 = 20名 Table 3 = 20名	申し込み制	持続可能な社会を「本気」でつくるとお考えの 行政、企業、NPO/NGOの方、市民、 学生など

スケジュール	
14:00 ~ 14:15	15 オリエントーション
14:15 ~ 16:45	150 MSHダイアログ
Table 1	「サステナブルな地域をつくるために…公共性・経済性という指標」
Table 2	「プロボノの可能性に迫る…サスピズ成功に向けて」
Table 3	「ESDを地域で実践するために…仕組みづくりと評価」
17:00 ~ 17:45	45 全体会…各ダイアログの共有時間
17:45 ~ 18:00	15 まとめ

「本気」でつくる
サステナブルな社会

MSHダイアログ・関係者による対話

マルチステークホルダー



名古屋駅から徒歩2分(中村区名駅4-4-38)

主催：環境省中部地方環境事務所 環境省中部環境パートナーシップオフィス

「サステナブルビジネス」と「ESD」、キーワードは「経済」と「教育」である。この2つの領域から、持続可能な社会に向けての「事業化」を模索する。

Table 1 「サステナブルであるための指標を示す…協働の価値」

会場 1104

地域では様々な地域資源を活用した、サステナブル社会を実現するための「協働取組」が実践されている。
市民の理解と共感、参加を得る事業にしていけるか。
地域全体での包括的な取組へと発展させていけるか。
価値のある事業をいかに地域に根づかせるか。
「協働取組」がもつ課題に対して、「公共性」「経済性」の観点から意見を交わす。

【協働取組事例】

平成26年度地域活性化に向けた協働取組加速化事業

【愛知】リユースびんを活用し循環型社会を構築する「めぐる」プロジェクト

【福井】ブルーフラッグ認証取得活動を通じた海岸維持管理体制の再構築

平成25年度地域活性化に向けた協働取組促進事業採択団体

【富山】越の国自然エネルギー推進協議会

【参加者】

●協働取組事業者

- 【富山】竹平 政男氏 (越の国自然エネルギー推進協議会会長)
- 【福井】吉岡 久氏 (一般社団法人若狭高浜観光協会事務局長)
- 【福井】米川 浩司氏 (高浜町まちづくり課主査)
- 【愛知】永田 秀和氏 (NPO法人中部リサイクル運動市民の会代表理事)
- 【愛知】星野 和平氏 (「めぐる」プロジェクトプロボノ)

●出演者

- 【富山】老田 優介氏 (富山県生活環境文化政策課環境政策課主事)
- 【石川】新 広昭氏 (石川県環境部次長兼温暖化・里山対策室長)
- 【石川】三國 千秋氏 (北陸大学孔子学院学院長)
- 【福井】吉川 守秋氏 (NPO法人エコプランふくい事務局長)
- 【長野】宮島 和雄氏 (一般社団法人長野県環境保全協会専務理事)
- 【長野】丸山 一博氏 (長野県環境部環境政策課企画経理係 担当係長)
- 【岐阜】神田 浩史氏 (NPO法人泉京・垂井副代表理事)
- 【岐阜】市来 圭氏 (NPO法人ぎふNPOセンターフェロー)
- 【愛知】三矢 勝司氏 (名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センター特任助教)
- 【愛知】西野 慶徳氏 (名古屋環境局環境企画部環境企画課係長)
- 【愛知】平沼 辰雄氏 (愛知中小企業家同友会会長)
- 【愛知】大西 光夫氏 (NPO法人ボランティア・ネイバース理事長)
- 【三重】内田 郁夫氏 (三重県環境生活部地球温暖化対策課環境評価・活動調整 参事兼班長)
- 【三重】矢口 芳枝氏 (四日市大学エネルギー環境教育研究会事務局長)

他

Table 2 「プロボノの可能性に迫る…サスピズ成功に向けて」

会場 1104

サステナブルな社会をつくるためには、「斬新な発想」と「積み重ねた経験」のコラボレーションによる「新たな社会価値の創造」が必要である。
プロボノはそれを可能にする「策」である。
企業の視点から見ると、社員の「生きた研修」の場となり、会社の財産である「人材の育成」となる。
NPOの視点から見ると、「足りないものが補完」され、社会影響力を高めることができる。
このマッチングを成立させ、プロボノの価値を社会にどう根づかせるか。多様なステークホルダーと議論する。

【出演者】

- 【愛知】戸成 司朗氏 (NPO法人中部プロボノセンター代表/住友理工株式会社CSR・社会貢献室長)
- 【愛知】間瀬 康文氏 (ブラザー工業株式会社コーポレートコミュニケーション部 グローバルブランドグループ企画管理チーム・マネージャー)
- 【岐阜】興膳 健太氏 (NPO法人メタセコイアの森の仲間たち代表理事)
- 【愛知】戸枝 陽基氏 (社会福祉法人むすむす理事長)
- 【愛知】村田 元夫氏 (株式会社ピー・エス・サポート代表取締役)
- 【愛知】岩崎 唯之氏 (環境パートナーシップ・CLUB総合事務局部長)
- 【愛知】山田 厚志氏 (株式会社山田組代表取締役)
- 【愛知】島原 久實氏 (株式会社マルク代表取締役)
- 【愛知】神戸 千隆氏 (株式会社アンソー経営企画部経営戦略室長)
- 【愛知】清沼 清治氏 (瀬戸信用金庫営業推進部 資産・経営相談グループ次長)
- 【愛知】鈴木修一郎氏 (株式会社ウェストボックス代表取締役)
- 【東京】嵯峨 生馬氏 (NPO法人サービスグラント代表理事)

他

Table 3 「ESDを地域で実践するために…仕組みづくりと評価」

会場 1105

2014年11月にESDユネスコ世界会議が開催され、ESDに取り組む世界の人々が集結し、国連「ESDの10年」の成果の共有と、今後の展開について議論が交わされた。
ここ中部地域においても、多様なステークホルダーの、ESDの重要性に対する理解が進み、学校と地域の連携によるESD授業実践が進められている。
この成果を踏まえ、ESDの取組を継続、また、他地域に展開するために、ESDの評価とESD推進のための体制づくりが求められる。いかにESD実践を支える地域基盤を形成するか、について意見を交わす。

【出演者】

- 【富山】宮原 美充氏 (富山市立中央小学校教諭)
- 【富山】本田 恭子氏 (環境教育ネットワークとやまエコひろば代表)
- 【石川】鈴木 克徳氏 (金沢大学環境保全センター長・教授)
- 【石川】池端 弘久氏 (金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キコ山ふれあいの里館長)
- 【福井】今井 尚子氏 (学校法人嶺南学園敦賀北高等学校付属中学校中務主任)
- 【福井】土橋 佳久氏 (福井県安全環境部環境政策課環境計画推進グループ主任)
- 【長野】渡辺 隆一氏 (信州大学特任教授)
- 【岐阜】小川 美鈴氏 (岐阜県環境生活部環境生活政策課政策企画係課長補佐係長)
- 【岐阜】小林由紀子氏 (NPO法人e-plus生涯学習研究所代表理事)
- 【愛知】大藤 聖公氏 (愛知教育大学准教授/なごや環境大学実行委員)
- 【三重】寺田 卓二氏 (四日市自然保護推進委員会)
- 【三重】寺本 豊氏 (学校法人津田学園津田学園小学校校長)
- ESD人材育成事業 愛知発表会
- 【愛知】服部 易弘氏 (名古屋市長八幡小学校教務主任)
- 【愛知】大村 邦仁氏 (名古屋市長八幡小学校努力点推進委員長)
- 【愛知】千銀 聡氏 (日本福祉大学教授)
- 【愛知】川原田真弓氏 (名古屋環境局環境企画部主幹(環境教育))
- 【愛知】戸河 辰彦氏 (NPO法人藤前千濁を守る会藤前活動センタースタッフ)

他

参加申込書		FAX 052-218-8606	
(ふりがな)	(ふりがな)	部	職
氏名	所属組織名	署	役
〒	ご住所	T E L	
		F A X	
		E-mail	
参加を希望するTable	Table 1	Table 2	Table 3
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
で囲んでください			

